

---

# ぼくがぼくであるわけ

いおり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぼくがぼくであるわけ

### 【ZPDFード】

Z9519D

### 【作者名】

いおり

### 【あらすじ】

今の生活になんの不満もないけれど、なにか居心地の悪さを感じている高1の望。彼が出逢った不思議な少年？悠希。悠希には生まれる前の記憶があるというのだけれど。望と悠希の二人の視点から物語は進行していきます。悠樹のせつない恋の行方は？最初Bしつぽいけど違いますので、あしからず！？完結しました。

## 1・望～日々～（前書き）

最初の方はBっぽいのですが違いますので。

望と悠希、二人の視点から物語が進行しますので、多少ダブル箇所がでてきます。

## 1・望～日々～

新月の夜、マンションの上空に一つの白い光の玉が出現し、ゆっくりと暗闇を旋回していた。

少し遅れて、一つの玉が天より舞い降りてきた。

よく晴れた朝だった。

こんな日は、高校へ行かず、いつもとは反対の電車に乗って、どこか遠くへ行きたいなあ、なんて思つことがある。

今日も、そんな気分だった。

でも、ぼくはそうしない。

たぶん、他の人たちもぼくと同じことを考えたとしても、やまはしないよ。

いつものよつに満員電車がやつて來た。

ぼくは他人たちの流れに乗つてその中に吸い込まれて行く。

なんだかそれが、凄く当たり前のようでもあり、違つような気もする。

今の生活リズムの中にいることが、心地よいようでなにか異物が喉につかえているような違和感を覚える。

本当は、自分がここにいるべきではないような不思議な感覚にとらわれる。

まるで、家族が他人に思えて、自分も別人に感じる、そんな時がある。

ぼくがぼくではないような……。

「わりーい！ 今日の約束バスな」

放課後、帰り支度をしているぼくの肩を内海くんがたたいた。

「どうして？」

「俺、さあー、今日、彼女とデートの約束しちゃつたんだ」

内海くんは少し照れて、頭をかいている。

「『』の映画、内海くんが行くつていうからチケット買つたんだよ

そうだ、本当はこんな映画、ぼくは行きたくなかったのだ。

「これさ、お前にやるから彼女とでも行けよ

「そんな人、ぼく、いないよ

ぼくは今だかつて、彼女がいたこともないし、振られたことも無い。

別に、女嫌いで男好きなんていう人種でもない。

ただ、人を好きになれなかつただけで。

「だつたら、いいチャンスじゃないか、このチケット餌に、誰かさ  
そえよ。<sup>のぞむ</sup>望が誘えれば、その辺の女子なら誰でもついて来るつて。  
おまえつて意外と女子に人気があるんだつてよ、母性本能くすぐ  
るとかつて。なんなら俺が頼んでやろうか？」

「いいよ

ぼくは内心穢やかではなかつた。

男が母性本能をぐすぐぐるつてほめられて、ちつとも嬉しくはない。  
男らしいとか、たくましいとか言われるならこそ知らずだ。

「望と映画に行きたい女子いませんかー。」

内海くんが手を高々と上げると、チケットをひらひらと飛んで叫んだ。

「やめてよー。」

ぼくは慌ててチケットをもぎ取った。

「内海くん！」そ、ぼくのをあげるから彼女と行つたら？

「あややな、ラブストーリーがいいんだって。んじゃ、時間無いか  
ら、俺こへせ」

「勝手に楽しんでおこでよ」

「この埋め合せは、必ずするからな

「期待しないで待つてるよ」

高一になつても、ぼくは、こまだに自分をぼくと呼び、友人たちもい

つの間にか俺と言っていた。

ぼくはいつまでもぼくであり、なぜか俺と呼ぶことに抵抗があった。

## 2・望 ～俺という彼 1

学校の帰り道、高校の側の広い公園を、ぼくは歩いていた。

駅まで少し遠回りなこの道は、お花見の季節ならいざ知らず、普段、高校の下校時間に利用する人はまずいない。

ぼくはこの静けさが気にいっている。

桜の木の仄暗いトンネルを抜けると、ちょっとした広場があり、急に明るくなる。

なんだかその光のギャップが、まるで瞬間移動でもしたかのようなくず覚を覚える。

そんなところもいい。

新緑のアーチを抜けて目の前が一気にひらけた。

弱まり始めた光の中、バスケットボールを一人追っている中学生位の少年がいた。

キヤップを深くかぶりカーキ色で7分丈のショートパンツに白いだぶだぶのパーカーを肘までまくっている。

砂埃を上げで走り回る彼の姿は、まるでボールと戯れているような軽やかな動きだった。

彼の背丈はぼくと同じ位、たぶん、一六〇センチ弱つてところかな。

ぼくに気付いた彼は側に来ると、上から下まで睨め回すよいつばくを見る。

彼の人を射るような目付きに、ぼくは一歩下がった。

「可愛いじやん」

拍子抜けした。

人を睨みつけておいて言ひような言葉ではないし、まして男が男に言ひセリフでもない。

「きみひあ、バスケ好き?」

彼はぼくを挑発するように、ドリブルを始めた。

普段だったら、こんな見知らぬ少年のことなど無視して通り過ぎるはずだった。

なのに、今日は違っていた。

なんだか頭と関係なく、身体がついていつてしまつた、まるで条件反射だ。

ぼくは、あまり運動神経がいいとは言えない。

でも、なぜか球技は好きだつた。

ただ、うまいとはいえないけれど。

### 3・望／俺という彼 2

ぼくには、彼の後を追うのが精一杯で、ボールを奪うことなどいつてい出来なかつた。

その間、何度となく彼は器用に同じ枝と枝の間にボールをくぐらせる。

彼の目には、ボールとバスケット代わりの枝しかはいてつていよいようだつた。

ぼくという存在が忘れ去られているようだ。

だが、じばりくすると彼は、ぼくのペースに合わせてくれるようになつた。

彼の背中しか見ないとの出来なかつたぼくを、やつと、前へ回り込ませてくれた。

右、左、右

フェイント！

彼はぼくの攻撃を軽々とすり抜けた。

彼のボールが取れそうで取れない。

まるで彼の手とボールが強力なゴムでつながれているようだ。

いつしかぼくは、このゲームが楽しくなつていた。

なんだか懐かしい感覚だった。

ひょっとした弾みに、ぼくの足が彼の足を引っ掛けてしまつた。

あつという間に、彼は地面に倒れた。

「いめん」

謝りながら差し出したぼくの手につかまつとして、彼は急に手を引っ込んだ。

砂にまみれた手と体をはたきながら、彼は立ち上がつた。

彼がパンツの裾を少しくし上げると、砂のついた右膝には血がにじんでいる。

ぼくは近くにある水飲み場へ彼を連れて行つた。

「ちよつとじみるかも」

ぼくは、彼のけがをした膝に水をかけるまえに声をかけた。

かがんでいたぼくは、彼を見上げた。

のぞきこんでいた彼の顔が、すぐ田の前にある。

まじかで見た彼の顔は、長いカールのかかつたまつ毛に縁取られた一重。

しかも黒目がちの大きな眼をした女顔である。

ぼくなんかより、彼の方がよっぽど可愛い顔をしている。

きっと、彼もぼくと同じように幼少時代には女の子と間違えられたに違いない。

ひょっとして、今もかもしれない。

なんとなく親近感がわく。

まあ、ぼくはといえば、もう女子に間違われることもなくなつたが。

彼の膝に水をかけながら、ぼくは以前にもこんなことがあつたような気がした。

「しみる？」

彼をもう一度、見上げながら聞いた。

「大丈夫」

言葉とは裏腹に眉根にしわをよせている彼が、なんだか微笑ましかった。

彼は洗い終わった手足をハンカチで拭きながら、ぼそっとつぶやいた。

「ありがとう」

語尾は聞き取れないぐらい小さかった。

傷口からは、まだ血がにじんでいる。

ぼくが鞄から絆創膏を取り出そうとすると、チケットが落ちた。

彼はそのチケットを拾い上げた。

「一枚？ この映画、確か今日までじゃん」

「一枚は友たちの分だったけど、もつ要らなくなつた」

彼の膝に絆創膏を貼つてあげた。

「彼女と行けば」

「そういう人いないよ！」

思わずぼくは声を荒げてしまった。

みんな同じだ、彼女、彼女つて。

なんだかがっかりした。

彼だけは、そんな普通の人があつよくなきまり文句を口にしないと、勝手に思っていた。

「ふうん、じゃあさ、俺と行かない？」

こんな可愛い顔してて、彼も自分を俺つて言つんだ。

なんとなく、顔と言葉のアンバランスさを感じた。

#### 4・望～映画館

彼に引かざりれるよつて、ぼくは駅近くのシネコンへやつて來た。

この一角はイタリアをイメージしたとかでちょっと異空間に迷い込んだかの錯覚を覚える。

それはともかく、だいたい、なぜ初めてあつた人とぼくは映画を観にこなくてはならないのだ。

そう思いながらも、なんだか彼には逆らえないものがある。

ぼくは押しに弱い。

これは生まれた時からかもしけない。

「映画にはやっぱリポップコーンだよね」

甘い香りのするキャラメルポップコーンを、彼は口一杯に頬張ると満足そうな顔をした。

まるで子供みたいだ。

ぼくは「一ラを飲みながら、なんだか盗み見るよつて、彼のおいし

やつに食べる顔へ皿をやつた。

ポップコーンを三分の一ぐらい食べたところで、彼は急にまくの前にポップコーンの入れ物を差し出した。

「「あん、気付かなくつて」

「「ホシ、」ホ」「ホ」

ぼくはまるで、こけないことをしているところを見とがめられたかのようになびきつくりして、口に入っていたコーラの一部を気管に流し込んでしまつた。

「大丈夫？」

「あつ、う、うん」

まだすりむいた様にひりひりする喉で答えた。

「欲しいならや、手えだせよ。俺、氣利かないからさあ

彼はスクリーンを観たまま、ぶつかりまつて立つ。

「あつ、こや……」

ぼくが彼の方を時々見ていたのを、どうやらポップコーンが欲しいのと勘違いしたらし。

そんなに、もの欲しそうな顔をしていたのだろうか？

物欲しそうな顔つて……？

なんだかばかしくなって、うつむいてしまった。

本編が始まつても、隣の彼が気になつてなかなか映画に集中できな  
いでいた。

彼は何者なのだろう？

突然、ぼくの目の前に現れ、何のためらいもなくぼくを自分のペース  
に引きずり込んでくる。

だがそのうち、その疑問も忘れて、ぼくは映画の世界にのめりこん  
でいった。

そして、主人公を助ける為に恋人が撃たれて死んでしまう場面で、  
ぼくは不覚にも目に一杯の涙をたたえてしまった。

でも、その涙は主人公に同情してのものでも恋人に対するものでも  
ないような気がする。

なんていうのか。

まあ、どうにか内海くんと一緒に泣くよかった。

涙してこるとこなび見られたら、また、彼にぼくをからかうネタを提供してしまつただろう。

いや、案外、内海くんのまつが先に泣き出していたかも知れない。以外に彼は、ぼくより涙もろいまつだ。

内海くんは、そんなとき、必ず言ひ言葉がある。

『男は女より情が厚いのだ』。

でも、ぼくは情が厚いか薄いかと涙の関係は無いと思つたが。

涙を流さずとも悲しこときは悲しいし、空涙とこつものもある。

ふと、彼のことが気になつて右側を見た。

あちこちから響いてくる鼻をすする音と対に、彼はあくびをしていた。

映画が終わる頃には、彼は映画ではなく夢を見ていのよひだった。

## 5・望 ハーバーガーショップ

映画館を出ると、あたりはすっかり暗くなっていた。

「腹減った。ハンバーガーでも食べてかない？」

「ぼくは」

「気に入んないで、俺がおーじるから」

「やうじやなくって」

彼には人の事を考える心が欠如しているんじゃないかと思つ。

「あつ、じーじー。じーの店よそのよつちよつと高いけど、おこ  
しいんだよな」

「えつ、あつ、うん」

「なあ、チケットの御礼させてくれよ」

店内は若者たちで騒がしかつた。

ほくのよつな制服姿が多い。

あれだけのポップコーンの山を食べつくしながら、まだおなかがすいていたらしく彼はひと言もしゃべることもなく食べている。

ロースカツバーガーとポテトフライにコーラーシューカーを、彼はきれいに食べつくした。

「ふつー。満足、満足」

無愛想な彼は、物を食べている時、一番幸せな顔をしている感じがないかと思う。

「映画ビデオだつた？」

以外に面白かった。

口にしそうとしてやめた。

この映画のクライマックスに大あくびをしていた彼がビデオ思つていいのかを気にして、気のない返事をした。

「まあまあかな」

「ふ～ん、じゃあさ、あの恋人みたいに、君は人の為に死ねる?」

ぼくは黙り込んでしまった。

「どう?」

「わからない。自分の命が惜しいとは思わないけれど、人を好きになつたことないし」

なぜこんなこと、あつたばかりの人と話しているのだ? つ。

「きみの……、自分の命、惜しくないの?」

彼はすかずかとぼくの領域を侵していく。

彼のまっすぐな視線を感じてつむいてしまった。

こんな話題から早く離れたい。

「俺、死ねるよ」

「なぜ、そんなこと言えるの？」

わざわざと諒解する彼に、腹が立つてきた。

「俺、そういう人いるから」

ドクンとぼくの心臓が波打つた。

彼にはいるのか、そういう人。

でも

そんなの

口だけに決まってる。

偽善者！

「でも、残された方はどうなるんだろう」

ふと言葉がついて出た。

「うれしい？　自分のために死んでくれてうれしいこと無いつへ。」

なこをしゃべつてこるのだりつ、ぼくは。

意地が悪い。

自分でやつ思いながらも、次々と言葉が出てくる。

「そんなの、死んだ人の自己満足だよ。死んだらそこで終わりだけど、残された方は、一生苦しんで生きていくんだよ。たとえ、死んだ相手を愛していなかつたとしても、」

何をぼくはむきになつてこるのだりつ。

こんな初めて会つたばかりの少年の前で。

テーブルに両肘をつきその上に顎を乗せたまま、じつと彼はしゃべり続けるぼくを見詰めている。

なんだかその瞳にドキッとした。

「だよね」

彼はすくっと立ち上がるときも背を向け、手を肩の辺りで左右に振ると去つて行った。

残されたぼくは、しばらく呆然と、今まで彼が居た場所を眺めていた。

なんだつたんだ、あいつ……

彼に会つてから、ぼくは不思議な夢を見るよつになつていて。

それは、二つの光の玉がぼくの住むマンションに飛んでくるといつものだつた。

## 6・悠希～女子校

「悠希～ 部活は？」

慌てている俺にナオが声をかける。

中学からの親友だ。

「「」めん、言い忘れてた。今日はバス！」の間の検査結果聞きに、病院行かなきゃなんないから

「それだけ元気なら、問題無いってことかな

「まあ、これも親孝行の一つひとつで

「悠希が、親孝行とはね

「たまにはね。じゃあ、バーイ！ あつ！ 部長に叫ぶとこで

鞄を持って、俺は教室を飛び出した。

「悠希ひま～、バスケは？」

体育館とは反対の方向へ歩き始めた俺に、廊下でたむりっていた女子たちがキヤーキヤーと騒ぐ。

「またね！」

俺がウインクを投げかけると、黄色い歓声はさらに大きくなつた。  
これじゃ、まるでアイドルだね、俺は苦笑した。

まあ、この状況を幾分楽しんでもいるし、反面わざわざいと思つ  
こともある。

もともとこのお嬢様学校を選んだのは、俺の男っぽい性格を危ぶん  
だ両親だった。

中高一貫である女子校に入れれば、少しほは女らしくなるであろうと  
いうありがた〜い親心から、俺を無理やりここに閉じ込めたのであ  
る。

もし、この様子を見たら、自分たちの選択が誤つていたのではない  
かと大いに悩むに違ひない。

だいたい女ばかりといつのは、かえつて恥じら〜といつものを無く  
すみたいだ。

暑い日にはスカートの裾をバタバタさせて涼んだり、大声で彼氏と  
あつたことを話していたり、そばにいるこっちの方がなんだか恥ず  
かしい。

だが、まあ初めのうちは嫌々だった女子校生活だが、今では大好き

なバスケをやって、それなりに楽しんでいる。

高等部になつて一年のうちからレギュラー入りを果たした俺は、時々一部の先輩から嫌がらせを受けることもあったが、大半の人は優しくしてくれるのとそれなりに居心地がよかつた。

白痴じやないが、成績も常にトップクラス。

いやー、青春を謳歌しちゃつてるつてわけだ。

だが、俺は、ここが本当の俺の居場所でないことを知つてゐる。

俺には、生まれる前の記憶がある。

それは、俺の本当にに入るべきだった身体に、どじなあいつが間違つて入つてしまつたというもの。

だから俺は、仕方なくあいつが入るべきだった身体に入った。

ようするに、本当は俺が男で、あいつが女に生まれてくるはずだったのだ。

まあ、そんな話し、誰も信じぢやくれないけどね。

たぶん、あいつも信じちゃいない。

だから、そのことば転校して以来口にしたことはない。

それでもこれは紛れもしない事実だ、変えよつがない。

もしも、あいつが、あの時、間違えさえしなければって思わないこともない。

だからと書いて、俺はあいつのことを忘んではいない。

なぜなら生まれる前から、俺はあいつに好意を持っていた。

どうして、生まれる前からあいつが好きなのかわからない。

人はそれを“運命の人”と呼ぶのかもしれない。

でも、俺はそんなのビリでもいい。

ただ好き

ただ、あいつと一緒にいられるなら他のことなどどうでもいい。

そして、こつまでも一緒にいられると思つていた。

だけど、それは、ほんの少しの間だけで、俺たちが小学校一年に、俺の家は引っ越してしまった。

それから一度だけ、一人であいつの家に行つた事があった。

それから、あいつには会つていない。

小六の時、近くに越してきたのだから会いにいけない」ともなかつたのだが。

俺の本当の身体を持つ、  
望。

望は、今、どうしているのだろう。

今でも俺が会いに行つた日のことをこだわつてこるのだろうか？

それとも、俺のことをすっかり忘れているのだろうか。

しばらく思い出す回数が減つていたあいつのことを、この頃頻繁に思つ出すようになった。

会つてみたいなあ。

## 7・悠希 ～むじりたい

タベ俺は眠ることが出来なかつた。

医者に言われたことが頭の中をグルグル駆け巡つて。

ただの筋肉痛だと思っていた膝の痛みが腫瘍のせいだつたなんて。

骨肉腫。

詳しきは検査のための手術をしなけりや判んないて言われたけど。

大概は良性で化学療法や手術で治るつて。

だけど

もし

バスケ

出来なくなつたら?

もし

死

の?

白み始めた空を見上げながら、家を出た。

会こに行こう、俺の本当の身体に……。

俺の昔住んでいたマンションは、俺の利用する駅から三つ下った駅の近くにあった。

引っ越ししてから一度、行ったつきりだ。

だけど、たゞり着ける自信はある。

ずっと戻りたいと願っていた場所なのだから。

いや、場所とこより、戻りたい時間。

いつだつて望に会こに行こうと思えば、会えたのかも知れない。

まして、4年前、駅みつままで近づいたのだから。

俺達の心の距離は駅の数よりも遠くなつていたのかも知れない。

あの時以来

手入れの行き届いたマンションは、7年も経つといつもこまつたく変わっていない。

オートロックのドアを出て来た人と入れ違いに中へ入った。

オートロックの効果なんてこんなもんだ。

入ってすぐ田の前にエレベーターはある。

だが、俺はそれを利用せずに階段を使った。

バスケで鍛えているはずの俺の心臓が、たった一階分登つただけで苦しい。

永遠に望の部屋にたどり着けないんじゃないかと思つた。

四〇七号室、これが、俺の家だった。

へー、今は中田つて人が住んでるんだ。

ピンポンを押して『俺、昔ここに住んでたんですよー』なんて言つてみたい。

その隣が望の家……。

急に不安がよぎった。

今もまだ望の家族が、ここにいるのだろうか？

今まで考えもしなかった、  
望の家族が引越ししているかも知れないなんて。

俺は、おやおやおやおや田を向けた。

隣の角部屋

四〇八号室

弘前。  
ひろまち

よかつた！

「こつてらつしゃーー！」

中から女性の明るい声がする。

中年の男性が出て来た。

望のお父さんだ。

慌てて帽子を深くかぶり階段を登りかけた俺に、おじさんが声をかけてくる。

「おはよう」

「おはよう」

自然なおじさんの挨拶に俺は緊張気味に答えた。

階段を降りかけたおじさんは一度振り向いて俺を見た。

一瞬怪訝な表情を見せたがすぐに階段を降りて行った。

十年と言つ歲月が、おじさんの髪をかなり白くしていた。

でも、老けたと言つよりも、滌を増していく感じ。

さすが、俺の本当の親父になるはずだった人だ。

## 8・悠希～望

5階へあがる階段の途中に腰を下ろして、望が出て来るのを待った。

何度も何度も時計を見た。

ちつとも進まない時計の針に、壊れてしまつたんじやないかと時計に耳を当てた。

ものすごいスピードで波打つ俺の心臓の音にかき消されてしまうのではないかと思つほど、小さな音をゆっくりと刻んでいた。

膝の上に乗せた腕にはめられた時計に耳をつけたままそつと呼吸をする。

時を刻む音と俺の命を刻む音が次第に一つになつていく気がした。

なんとなく落ち着く。

あれからどれくらい経つたのだろう、408号室のドアが開くとグレーのブレザー姿の望が出て来た。

ここからでは、顔の確認は出来ない。

まあ、顔見たところで、本人と確認できるかは問題だが、でも、望に間違いない。

小学校2年当時、望には兄弟がいなかった、もし、その後できたら  
しても、まだ小学生かそれよりも小さいはずだ。

彼が望に間違いない。

すばやく望の後を追つた。

ある家の前で望は立ち止まる。

この家の人と学校に行くのだろうか？　相手は？　女の子、それと  
も男？

どうして、すぐ不安になる。

恋人がいるのだろうか？

今まで予想だにしなかったことが頭をよぎり、漬物石でも飲み込んだ  
気分になつた。

「むう～やあん」

俺のいる位置から、やつと聞ひえたるべつこの声がする。

「むう～やあん？」

あいつの言葉を反芻してみる。

お・ん・な

そのとき、息を切らして望の胸に飛び込んできたのは、ブルドックだった。

犬の勢いに倒れそうになりながらも、かろうじてバランスを保った望は、めちゃくちゃうれしそうな顔をしてその犬の頭や体中を撫で回した。

犬、好きなんだ。

そう言えば、子供の頃ふたりで子犬を拾つてきて怒られたことがあつたつけ……変わってねえなあー。

ほつとした。

俺も犬になりたい！

でも、ブルドックは遠慮しどきたい、どっかつていつたら、トイプードルやチワワのように女の子受けするやつがいい、うつ、俺つて変態？

駅のホームで、望はぼーっと上を見上げている。

俺も望の眺めている景色が気になつて、少し離れたホームの端で上を見上げた。

そこには、ホームの屋根と屋根の間越しに、電線で五線譜を引いた  
よつな細長い青空が広がっていた。鳩でもとまつていればそれは  
おたまじゅくし、完璧だね。

反対のホームに電車が入つて来ると、望はその電車を見ていた。

あいつ、今の生活に満足してないのかな？ なんだか、そんな気が  
した。

そのとおり、轟音を立てて望の前に電車が入ってきた。

急いで俺は、望の並んでいた列の後ろについた。

電車に乗り込むときは必死で忘れていたが、気付くと望は田の前に  
いる。

俺の心臓はまるでドリブルでも始めたよつて、暴れだした。

今日の前にいるのは、本来は俺の身体だつたはずで……

なのに、なんで？ なんで、こんなに緊張するのだろう。

俺は大きく深呼吸をしてしまつてから、あわてて口を手で押えた。

やべー！ これじゃあ、いつも俺が迷惑をこうむつてこる変態おや

じと一緒じゃねえか。

電車が大きく揺れ、誰かが俺の足を踏んだ。

「いって」

小さな悲鳴が、俺の口から漏れるのと同時に、声がした。

「あつ、すみません」

身動きの取れない車内で耳に届いたその声は、望！？

かすかに向けられた横顔がそこにある。

「い、いえ」

俺は白いトレーナーを着て来たことを後悔していた。

尾行するには、ちーとばかりめだらすがるんでねえの？

## 9. 懇親～公園で（前書き）

「いいから、墨 編と少しがらぬいいのが出てしゃまや。

## 9・悠希～公園で

朝からずっと、望が通う高校近くにある、この公園に俺はいた。

望が学校へ行くのを見届けてからずっと。

朝は心の準備も出来てなくって、声をかけられなかつた。

望は、この公園を抜けて学校へ向かつた。だから、ここで待つて  
いれば、きっと、帰りにもここを通るはずだ。

そうは思ったものの、授業の終わる時間を過ぎても、生徒が誰一人  
として通らない。

あいつは来ないかもしね。

そんな不安をかき消すよつこ、誰かの忘れていたバスケットボーラーを追いかけていた。

木に向かつてショートしたボールを拾い上げたとき、俺はあいつを見つけた。

いざ、あいつを田の前にしたとき、なんて言つていいのか分からなかつた。

俺は何を言つたために今まで待つていたといつのだ？

今までには、あいつに会えたうれしさで舞い上がっていたが……

急に俺は自分に迫っている、死とこうもの改めて自覚した。

もし、望が生まれてくるとき、入る身体を間違えさせしなかつたら、俺はこの若さで死の心配などしなくてもよかつたのだ。

あいつが間違えさせしなければ、俺はちゃんと男として生まれ、そして、これからも生きていいくことが出来たのだ。

俺の身体を返してくれ。

そんなこと、言えるはずがない。

そんなこと、言いにきたわけじゃない。

俺は望に近づいていった。

ただ、あいつの顔をもう少しよく見てみたくって……。

これが俺の本当の身体。

これが俺の顔、目、鼻、口……

「可愛いじちゃん

あつ、俺、なに言つてるんだ？ 仮にも男に対して……。

「君さあ、バスケ好き?」

会いたかったはずなのに、何か言いたかったはずなのに、なんて言つていいのかわからない。

俺はその場を切り抜けるためにドリブルを始めた。

そのとき、あいつのことは何も考えていなかつた。

ただボールだけを追いかけていた。

もし、望が俺を追いかけてくれなかつたら?

そんなこと、そのときは考へていなかつた。

幼い頃のように、望が俺の後ろをついてくる、ただ、そう思つていた。

いや、思つていたのではなく、感じていたのだ。

その通り望はついてきた。

少し経つたとき、俺の心に余裕が出来た。

望のことを尋ね、あいつのペースに合わせてあげることが出来た。

左、右、あいつは俺についてくる。

幼い頃のよう、我武者羅に食いついてくる。

おもしれー！

通学途中の駆けた望の顔が、嘘のように生き生きとして見える。

。やけに

なんで、やけにこのためには死ぬかも知れない俺が、この心配をしなくちゃならないんだ？

「あつー！」

「あつめん」

望が声を上げたときには、俺は地図に口づけをする前だった。

また、あいつのせいだ、あいつのせいで転んでしまった。

倒れた俺に差し出された手をつかみかけて俺は慌てて引っ込めた。

照れくさかった。

幼い頃はいつもつながっていた手、それから八年という歳月が過ぎ去った。

砂の付いた手と体をはたきながら、俺は立ち上がった。

パンツの裾を少し上げると、治りかけていたかさぶたが再び剥がれ落ちていた。

「うーっ、またやっつけまた。あっ！」

あいつは俺の肘をつかむと、水飲み場まで俺を引っ張って行った。

「いいよ、自分でやる」

「だめだよ、ちゃんと洗わないとバイキンに入るよ、それにぼくのせいだし……」

そつとつと望は俺のスニーカーと靴下を脱がせた。

『バイキンが入つたら、走れなくなりうよ』

幼い頃のあいつは、俺がけがをするといつもひつひつて俺の傷口に水をかけて洗ってくれた。

こうやってまた望に足の汚れを流してもうつたら病気も一緒に流れしていくのだろうか……

蛇口に手をやりながら見上げる彼の顔が、のぞきこんでいた俺の前髪に触れるかと思ひべらりこまじかに現れた。

慌てた俺は身体を起し、しおりになりながら田線をそらすだけにとびめた。

あいつを感じていたくつて……。

「ちよっとじみるかも」

望は視線を俺の膝に戻すと蛇口を開いた。

火照った足に、冷たい水が伝わってゆく。

細くて長いあいつの指が、優しく傷口に触れる。

傷の痛さとなんだかわからないもやもやが一緒にになつて、まるで塩をかけられたナメクジのように身体全体がキュツとちぢんじまつた感じ。

あいつの指が俺の膝から離れ、蛇口を閉めた。

それを名残惜しい思いで眺めながら、俺はポケットからハンカチを取り出すとそつと足を拭いた。

いつもだったら、傷口以外は無造作に拭いてしまつといふのだが、今日は違っていた。

『望の触れた感触をかき消さないよつ』

『望が鞄の中からひらひら取り出したりしている』

『たぶん、絆創膏だつ』

『昔、望はいつも絆創膏を持っていた』

『おとなしかつたあいつは、けがなんかしないのにいつも持つている』

『不思議に思つて、一度、聞いたことがあつた』

『『『望はけがなんかしないのに、何でいつも絆創膏持つてゐるの?』』』』

『悠希ちゃんのためだよ』

『その日以来、俺は母さんがポケットにいつも入れておいてくれる絆創膏を隠れて捨てていた』

『そんなことをふと思いつ出してみると、望の鞄からひらひらと何かが

落ちた。

拾つてみると、それは、俺の見たかったSF映画のチケットだった。

「一枚? 」この映画、確かに今までじやん

「一枚は友たちの分だつたけど、もつ要らなくなつた

俺の膝に絆創膏を貼りながらあいつは答えた。

「彼女と行けば」

心とは裏腹な言葉。

ぶつかりながらも彼女は彼の言葉を理解する。

もつ高校生だ、彼女べらついたつておかしくない。

まして、この身体の本当なり持ち主である俺が言つのもなんか変だ  
が、なかなかの男前である。

「そういう人いない?」

ふくれつづりで、あいつが答える。

「ふーん、じゃあそ、俺と行かない?」

よへ言つたー

俺  
！

嫌がる望を無理やり映画館へ連れて来た。

辺りにはキャラメルポップコーンのなんとも言えず甘い良い香りがする。

ポップコーンはショッピングだと思っていたから、初めて友たちに勧められいやいや口にしたときはえらい衝撃を受けた。

こんなのもあります。

それからは、必ず映画館で食べるのが楽しみになった。

だからもひるん今日も映画館に着くなり、ポップコーンを買った。

客席に着くと、俺はポップコーンを頬張った。

ポップコーンを途中まで食べたところ、ひらひらひらひらを見る望の視線に気付いた。

「ぐらうなって言つても、人が食べているのを観いたら欲しくなるよね。

「めん、気付かなくて」

朝家をでるとあは、望とあんな風にテートみたいことが出来ると

は思つてもいなかつた。

それがうれしくつてめっちゃ舞い上がつてゐる自分と、それどころじやないつて凄く冷めてる自分がいる。

でも、やつぱ、俺、望が好きだ。

ひさびさに望に会つてますますそれを確信した。

理由なんてわからなくつたつていい、ただあいつが好き。

だから、望の代わりに死んだつてかまわないつて本当に思つてゐるのに、それなのにめちゃくちゃ生に執着してゐる自分がいる。

好きなバスクがしたいから？

おいしいものをもつと食べたいから？

やり残した事があるから？

やり残したもへつたくれもねえ、まだ人生始まつたばかりじやないか。

望のそばにいたい

ただそれだけ

自分の命が惜しくないって  
なんで、望はそんなこと言つんだろつ

そんなあいつのせいで俺は死ぬ

あいつは

人のために死ぬなんて自己満足だつて  
たとえ、愛していなくつても……  
か、なんかそれって俺に突きつけられたみたいでけつこつこたえた。

俺はわかっている、子供の頃、望は俺に優しかった。

でも、それは誰に対しても優しいのであって、俺に対する愛情でも  
なんでもないことを。

「ゼーけんじやねえよ！ そっちの方からぶつかって来たんじやねえか！」

一年の先輩に向かって俺は叫んだ。

「あんたがぼさつとしてるからよ。だいたい生意気なのよ、一年のくせして」

ただ今バスケ部の練習試合の真っ最中、コートのど真ん中である。

部長に可愛がられている俺が気に入らないのか、部長がいないところでは嫌がらせがひどくなる。

部長が、普通の人だつたら、あんまり問題なかつたんだろうけど……

部長、朝霧涼華は、聖華女子のスーパー・アイドルなのだ。

彼女に憧れて入った部員は数知れず。

よつて、俺をうとましく思つ奴もいるつてわけ。

まあ、じへー部の人だけなのだが。

いつもならこの位の嫌がらせ、受け流していたところだ。

だが、この時、俺は虫の居所が悪かった。

昨日、望とトーーート？をして楽しんだ分、その反動が彼と別れてから起つた。

もう、バスケが出来なくなるかもしない、そんな苛立ちがあつた。

望のためなら死んだつてかまわない、その気持ちに嘘はない。

だけど俺、そんなに出来た人間じゃない。

「やつちが先輩だから我慢してやつてたのに、反則ばかりしゃがつて。審判も審判だぜ、これじゃ試合になんねえよー。」

「何も我慢してくれなくていいわよ、嫌ならやめなきよー。なんならバスケ部もやめれば」

「ああ、やめたやめた、こんな部辞めてやるー。」

こんなに明るい通りに学校を出るのは久しぶりだった。

まだ日の沈みきらないなか、マンションに灯る明かりを眺めていた。

溜息をつく

わつかから句度田だわつ

いらじへねえ

「悠希

「はーー。」

名前を呼ばれて反射的に返事をしてしまった。

「なに溜息ついているの、こんなところで」

声をかけてきた髪の長いスレンダーな女性は、自転車から降りた。

「あつ、朝霧先輩」

学校での髪を後ろに束ねている姿に見慣れていたので、一瞬誰かと戸惑った。

「悠希の髪つてこつちじやないでしょ。 そつか、私に会つに来たの」

「えつ、まあ」

「悠希が私に会いに来るわけないでしょ。 住所も知らないくせに」

「すみません」

切れ長の眼を細めて微笑む。

「聞いたわよ、安田さんたちとやつちやつたんだって」

頭一つ分ぐらい俺より背の高い先輩は、身体をかがめて顔を覗き込む。

「そりなんですけど」

「で、やめる気はないんでしょう、バスケ部」

すぐに返事が出来なかつた。

「家すぐそこなんだけど来る？ それとも、ここにでやつちつて彼氏でも待つてるの？」

「えつ、いや、つに懐かしくつて。昔すんでたもんだから」

「ここにいたんだ。奇遇ね、こんな近くに住んでたなんて。もしかしたらどうにかで会つていたかもね」

唇の端が少し上がる。

「会つていたら先輩みたいなきれいな人覚えてますよ、俺」

「へー、悠希がお世辞言つの」

「ね世辞じゃないですか」

「ありがたく受け取っておきます」

「ホントですか」

「ありがとうございます」

「いえ……」

「で、初恋の人でも住んでいるのかな、」

頷いてから、慌てて否定した。

「いえ、そんなんじゃないです」

「あんな顔してる悠希、初めてだったから、よりほど辛い恋の思い出でもあるのかな？」

「やだな先輩、俺だつていつもへらへらしてゐわけじゃないってスよ」

「わかつてゐるわよ、悠希はみんなが思つてゐるほど軽くないって。  
だから、心配なんじゃない」

「朝霧先輩に心配されるなんて光榮だな」

「なに言つてゐる。可愛い後輩たちのことはこつだつて気にかけて  
いるんですよ、先輩は。じゃ、あんまり遅くならないうちに帰

りなさいよ

「やつ帰つます」

「明日待つてゐるから

「それは……」

先輩は俺の返事を聞かないまま、長い足で軽々と自転車をまたぐと走り出していく。

すらりと伸びた手足で少し前かがみになつて、じぐ姿は、そのままになる。

まるで自転車が、別の乗り物になつてしまつたよつたかっこい。

バスケ好きの少年に出会って、十日程経つ朝だった。

あれから随分経つよ、すべて夢だったよ、不思議な感じだ。

あの日も今日みたいによく晴れていた。

いつものように、反対側の電車に乗る勇気も無く、人の波に乗っていつもの満員電車に乗りうとしていた。

「あの～」

一瞬、あの時の少年かとドキッとした。

まっすぐ伸びた艶やかな長い黒髪は明らかに彼とは違う少女のものだった。

隣のクラスのアイドル的な存在の少女だ。

ぼくらのクラスでも時々話題にのぼる。

たしか……

ぼくの前に桜の押し花がついた封筒が差し出された。

反射的にぼくはそれを受け取った。

さくら

「あつそつだ、桜木亜紀ー。」

へんな名前だつて思つてたんだ、春と秋が一遍に来たみたいで。

ぼくが手紙から視線を上げると、そこにはほのかに甘い香りが漂つ  
ているだけだつた。

次の瞬間、いきなりぼくは肘をつかまれ人の波から引っ張り出され  
た。

そしてそのまま、反対の電車に引きずり込まれそつになつた。

ドアは無常にもぼくをはさんだが、ゆっくりと開くとぼくを飲み込  
んで再び閉じた。

車内アナウンスが流れる。

「無理なご乗車はおやめください」

ぼくは辺りの冷たい視線に小さくなりながら、顔のほてつて行くの  
を感じていた。

しばりくじて我に歸り、自分を引つぱつてきた人の顔を見た。

あの日の白いトレーナーの少年だ。

「座りい」

ぼくの通つ高校とは反対方向に進む電車の中はすいていた。

「あつー。」

思わず大声を上げてしまい、今度は耳まで熱くなつた。

ぼくは初めて気付いた、彼が女の子であつたこと。

今時、誰もが制服のスカート丈をとても短くしているなか、膝の辺りまであるスカートをはいた彼、いや、彼女が目の前にいる。

「あやつ、じこみんのよーん」

ぼくの目線がスカートにあることに気付くと、わざとひじへ彼、いや、彼女がスカートの裾を鞄で隠した。

彼女は兎がぴょんとはねるよつて座席に座り、隣の席を手で叩いてぼくにも座るよつ促した。

隣にぼくが座ると彼女はぼくの耳に囁いた。

「男だと思つてたんだろ」

すぐさま「まづい」から後悔した。

普通、いつにいつ時は否定すべきではなかつたのだろつか？

今、目の前にいるこの人は、紛れも無く女に見える。

でも、始めて会つた時は男だと疑わなかつた。

まあ、見た目は女と言つた方が自然なんだけど……

だけどそれは、容姿といつより雰囲氣だつた。

「正直だね。でも、気にしなくていいよ。俺、全然氣にしてないから」

少しあは氣にした方がいいんじやないの……口まで出掛かつた言葉を飲み込んだ。

もつたひないな、女の子としてかなり可愛い部類に入るのに……

「俺、本当は男だし」

「……？」

「きみは考えたことない、女だつたら良かつたのにとかを」

「『ぼくは男だ』」

大声を出しちゃうになつたが、抑えた。

小さじこりにはよく女子に間違われ、女子だったら良かつたのにと言われ続けた身としては、いつこいつた会話には過剰に反応してしまう。

「あみは本当にあみなの？」

「『ぼくは……』」

言いかけて言葉に詰まる。

なんて言つていいのか分からぬ。

本当に、『ぼくはぼくなのだらうか？

いつもの疑問が心をかすめた。

今の生活になんの不自由も不満もない。

なのに、なぜか分からぬ居心地の悪さ。

## 13・望 2 ラブレター 2

「ラブレターでしょ、これ。 可愛い子だったね。 それに、望好  
きでしょ、髪が長い」

ぼくから奪つた封筒をぼくの手の前でちらつかせた。

「開けちゃおうかな?」

「勝手にすれば」

彼女は少し怒つた顔でぼくを見る。

「ほんと?」

「だつたら、返してよ」

「返して欲しいの」

「別に、こらなによ、そんなの」

彼女はじつとぼくを見詰めている。

なんだか彼女といふと調子が狂つ。

「それって、失礼なんじゃないの、彼女に対しても」

「きみが取つたんでしょ、読みたいなら読めばいい。ぼくはどつ  
ちでもいい」

「望は人を好きになつたことないから、そんな冷たいこと言ふんだだ。」

え？ 彼女はぼくの名前を呼んだ。

まだ名乗つてもいいの。

「淋しいね。 それって、生きてる楽しみひとつ減らしてるとか

彼女は手紙をぼくに差し出し、ぼくはそれを受け取る。

ぼくは、ただ生きている。

いつも、何か不安定な、とらとめのない焦燥の中で、ぼくは自分の生きている意味をつかめずになっている。

「ねえ、きみはなんのために生きているの？」

なぜだか彼女に尋ねてしまつた。

「好きなことをやるために

「好きなことをやつて？」

「バスケやって、うまいもん食べて、寝ることかな」

「そんなこと？」

「うそ、そんなこと」

彼女はぼくの悩みの答えを「とも簡単に言つてのける。

しかも、そんなこととあつたとしている。

「一番大切なのは、好きな人がいるから。でもさ、俺の片思いだけ」

ぼくを見据えてる。

どうして彼女は恥ずかしげもなく好きな人の事が言えるのだろう。

「あつ、おまえ、今、じつせふられたんだらつて思つただらつ」

「そ、そんな」と思つていないよ。今言われるまでは

「ひでえーな」

彼女の軽い肘鉄が飛んでくる。

「冗談、冗談」

「でも、はつきりふられた方がましかもな」

「生殺し状態」

「だね」

「かわこわい」

「ほんとうにやがて悪いわ。」

「うそ」

「じゅあれ、今度、テークしてやる」

「……」

「そんな困った顔すんなよ、ジョークだからさ」

「誰でもここなの？」

「そんなことないよ」

「でも……」

「きみだから」

「ほく？」

「わい」

「あい、学校」

急に学校を思い出して立ち上がった。

でも、彼女にブレザーの裾を引っ張られ、そのまますぐこイスに逆戻りした。

「海、見に行ひへ、海。 好きな作家が住んでる所があるんだ、このずっと先の駅に」

「家、わかるの？」

「知らない」

彼女の答えは簡単だ。

「それじゃあ

「知らなくつたつていいじゃん。 なんかさ、この海があの小説の舞台かな、とか考えたら、小説ん中飛び込んじゃつたみたいで樂しくねえ？」

生き生きと話す彼女が、うらやまし。

「一人で行つたら、ぼくを巻き込む理由ないでしょ」

「物事すべて理由が必要なわけ？ まあ、そういうタイプだね」

ぼくは何故か不愉快になつた。

まだ一回しか会つていない彼女に、ぼくの何が分かるところのだ。

次の駅で降りて反対の電車に乘れば、今日も今まで通り普通の生活に戻ることができる。

ただそうするだけのことなのだ。

そう、ただそうすれば元通りになる。

元通り……。

ぼくは電車を降りなかつた。

それにしても、だいたい彼女は、なぜぼくの前に現れたのか？

彼女は、今までぼくがやりたても出来なかつたことを、難なくやり遂げてしまつ。

彼女といえば本当の自分に会えるような気がした。

本当の自分で……？

ベルが鳴つて電車のドアが閉まつとしていた。

彼女はほくの手を引いて突然ホームへ飛び降りた。

彼女の行動はいつもジエットコースターのように、宙まぐるしく変わる。

ぼくはジエットコースターの縁に捕まつて、振り回されているだけのようだった。

それは、昔にもあつたような、懐かしい感覚だった。

そういうぼくは、子供の頃から自分から行動を起すといつより他の人に巻き込まれるタイプだった気がする。

「じゃあね。」これからだつたらまだ学校間に会ひだひ

彼女が側にあつた階段を駆け上がる。

「まつてー！」

思わず声をかけた。

「のまま分かれたら一度と彼女に会えない気がして。

彼女は、突然現れて唐突に姿を消す。

名前も知らなければ、ぼくからは連絡の取りよつけんもない。

「明日明後日と家の近所の神社がお祭りなんだ。一緒に行かない？」

言つてしまつてから、彼女と同じ制服の女子高生たちが辺りにいることに気付いて急に恥ずかしくなつた。

ここは彼女の学校の乗り換え駅だつた。

彼女は踊り場から振り向きざまに声を上げた。

「日枝神社！」

「知つてるの？」

「明日のお祭りと言つたらそことだ。俺、前近くに住んでた

そつなんだ。

ぼくは声にしなかつた。

恥ずかしかつたから。

「なあ、これつて、デートの誘い？」

「えつ、あつ……違うナビ」

「う」もつた言葉が、彼女のところまで届いたかはわからない。

「じゃあ、俺のじょうじょンテートってことで」

ショウシン？ 昇進、焦心……ああ、傷心。

「明日の土曜日、鳥居の前に四時。 キヤンセルはきかないよ

ぼくは、走り去つて行く彼女を見送つた。

あつ、ひよつとしてぼくは、彼女をテートに誘つてしまつたとつうわけだらうか？

でも、ぼくは、そんなつもりは毛頭なかつた。

ただ、このままあえなくなるのも淋しい気がしただけで……

その時、ぼくは手の中に残つてゐる封筒の感触を思い出した。

甘い香りのするかわいらしい封筒を見つめながら思つた。

ラブレターをもらつた同じ日、別の人をテートに誘つなんて、なんてぼくは不謹慎なやつなんだろう。

朝からなんとなくクラスメートのよそよそしい雰囲気を感じてはいた。

始めての「ちはじめ」一部のひそひそ話を見かける程度で、それがぼくに向けられてくるものとは思ってもみなかつた。

放課後まじかになると、ぼくのことを尊していると感じじるようになつた。

「よひへ、聞いたぜ、望ー。」

隣のクラスの男子と前のドア付近で話をしていた内海くんが、ぼくの所へやってきた。

「なにを?」

「すつげーな、望。 恋人いない歴十六年から、いきなりあんなかわいこちやんゲットか」

「えつ?」

「俺もさあ、適当など」妥協するべきじやなかつたな

「なに言つてゐるんだよ、内海くんには可愛い彼女いるじゃない」

「それがさあ、ここはとにかくついて、俺の話しておけばあいじやなこつつの。で、どうなんだよ」

「あ、彼女は、ただの知り合いで……」

「聞いてないぞ、そんな話」

「別に話すようなものでもないし」

「親友の俺にぐらり話したつていいだろ、そんなおいしい……いや、大切な話」

「そうかなあ」

「やうだよ、俺にだつてチャンスがあつたかもしれないし」

「なんの?」

「そりゃー、なんだなあ、お友達になる、だよ」

「彼女はやめておいた方がいいよ。口は悪いし、乱暴だし、それに女っぽいとこ全然ないし」

ぼくは、彼女の悪いところばかりを並び立てた。

でも、悪口を言つてしまつた罪の意識から、申し訳程度の褒め言葉を蚊の鳴くような声で付け足した。

「まあ、顔は、かわいいけど」

「亞紀ちゃんて、そんな娘には全然見えないけどなあ」

「あれ……あつ！ 忘れてた」

「なんだよ、誰の話してたんだよ。 他にも女いるのか？ 絶対許さねえ、じこつー。」

内海くんの怒りをよそにぼくは、制服のポケットから少し皺の付いた封筒を取り出した。

「へー、これか」

内海くんは、ぼくの手から封筒を奪い取った。

「ううん、いい香りだ。  
けちゃうぞ」

なんだ、まだ開けてないのか？

俺が開

「દુઃખ」

女の子からの手紙、そんなものがほんとうにどうやるのだと、うなづかせた。

なんだか、ぼくの知らないところで勝手に自分のことを考えている人がいると思うと薄気味悪い。

「本当にいいのか？」

内海くんの拍子抜けした声がする。

「手紙なんてどれもいつしょでしょ」

「ラブレターだぞ！ ラブレター！ 恋文！」

「どれもこれも集約すれば、好きです、付属的付属的で、この二つ」

「やんな」と言つて、ラブレターもいつたことあるのか？」

ほくほくはつぱついた。

「まあ、一通だよな」

「わづ少しかな」

「三通ぐりこ……」

内海くんは指を五本、六本と増やしていく。

「…………えー！ なんだよそれ！ こいつの間にやんなにわいつてんだよ。なんだか無性に腹たつてきた」

内海くんは封を切り、中に入っていた便箋を取り出していく。

『失礼なんじやないの』

突然、彼女の言葉が思い出された。

「返してよー。」

取り戻そうとしたぼくの手は虚空をつかんだ。

「ふ～ん、これが、今話題の恋文ねえ」

見慣れない男子が、ぼくのつかむはずだつた手紙を持つてゐる。

「だ、誰だ、おまえ？」

内海くんが大柄な見慣れぬ男子を見上げながらたじろいでいる。

「望の幼なじみ」

疑わしげにぼくを見る内海くんに、ぼくは首を左右に激しく振つた。

「どいつもこいつも、どうしてこんな優男がいいんだううね」

「ぼくはわからないでもないけど」

体格のいい男子の後ろから長身で細身の眼鏡をかけた男子が現れた。

「副会長！」

内海くんとぼくは一斉に声を上げる。

「光栄ですね、時の人覚えていてもらえるなんて」

「どう考えたつて、ぼくより新堂先輩の方が有名人だ。」

なんてつたつて会長よりも知名度が高い副会長。

成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗。

眼鏡は伊達でヨン様のよつに美しきわらわの顔を隠すためといつ樽もある。

「岩城が、弘前<sup>ひろまへ</sup>といつ名前に聞き覚えがあるつていつから、ついてきました」

岩城？ どこかで聞いたような……

ベース型の顔に太い眉毛。

どこか人を威圧する態度と身体。

「悠希の再<sup>せ</sup>従兄妹<sup>いりきみ</sup>だ」

ゆ・いき・わ? ゆ・い・わ?……

ゆ・いき・わ? や? や? ?

そつだ、小学一年まで隣の部屋に住んでいた男の……いや女の子。

そういえば彼は、たしか、悠希ちゃんの家によく遊びに来ていた。

あーつ！

「まつちやん！」

「その名で呼ぶな！」

ぼくが女子の子と間違えられていたのが嫌なように、彼も外見には似つかわしくないこの名前にコンプレックスを持っていた。

と言つても、本当は『まつ』ではなく『真理』と書いて『しんり』と読む。

「へー、まつちやんねえ

副会長が茶化す。

「悠希が勝手に呼んでいただけだ

「初恋の人にはそう呼ばせていたんだ

「つるわーーー

「彼女、じゅぢゅーーー

「あーーー

副会長の言葉を遮つてぼくは声をあげてしまった。

「会つたのかーーー

まつちやんが声を荒げる。

「たぶん

ぼくは、弱々しく答えた。

ぼくと同じ日に同じ病院で生まれた、オテンバでガキ大将のような女子。

反対にぼくはいつも悠希ちゃんの後ろに隠れてこるよつなおとなしい子供だった。

だから大人達には、男と女反対に生まれてくればよかつたのにねと言われた。

そうだ、あのジェットコースター娘は悠希ちゃんに雰囲気がそつくりで、顔も面影がある。

なぜ今まで気付かなかつたのだろう。

「たぶん？」

「彼女、名乗らなかつたから今まで気付かなかつたけれど、たぶん、彼女が悠希ちゃんだと想つ

「なに話したんだ！」

「べつに

岩城さんがぼくの胸倉をつかみかかつた。

彼女とまた会う約束をしたなんて言つたら、彼はぼくを殺しかねないほどの殺氣を放つている。

「べつに

岩城さんが唸る。

「今朝まで彼女のことを駄だと思つていたくらいだから……」

「フツ、やつぱり悠希ちゃんて、男の子みたいな娘なんだ。 ますます会つてみたいね」

「新堂にだけは会わせねえ」

「でもまあ、岩城が心配するよつなことは一人の間には無かつたようでもよかつたじやないか」

副会長の言葉にあまり納得した様子ではなかつたが、まいちゃんは教室を出て行つた。

「あのわあ、本当にラブレターそんなに沢山もらつたことあるのか？」

内海くんは聞き取るのがやつと出来る位の声をかけてきた。

「まあ、バレンタインのチョコと一緒にとか……内海くんはないの？」

「そんなこと、俺に訊くなよ」

「でも、みんなもつているのが当たりまえかと思つていたから」

ぼくのおなかに内海くんの軽いパンチが入つた。

「母さん！ 浴衣！」

玄関を開けてくれた母さんの顔を見るなり叫んだ。

「何よ、帰つてくるなり」

「去年、花火大会について、買つてくれたやつあるよね」

「いんなの着ないって、袖も通してくれなかつたじやない」

「明日、着るから出してよ」

「仮装大会でもやるの？」

「ひでえなあ、お祭りだよ、お祭り」

「お祭りこまし早いでしょ」

「日枝神社のだよ」

「日枝神社つて……ああ、昔住んでいたところの？」

「わ！」

「そう言えば今頃だつたわねえ。でも、どつしてまた？」

「望と約束したんだ」

「のぞむつて……」

## 「弘前望」

あの望ちゃん？」

「そうだよ」

「あの頃はひとつでも可愛かつたから、今はさぞやかつてよくなつてゐるでしょうね。会いたいわねえ……でも、なぜ壁ちやんと？」

「えっ、望みちゃんが誘つたの？ あの、おとなしい望みちゃんが、変われば変わるものね。 变わんないのは悠希だけじゃないの」

「あいつも変わつてねえよ」

「どう？」  
「だつて、悠希を『トート』に誘つたんでしょ？」

「データってわけじゃないし」

「なんだ、デートじゃないの。」あつ、悠希が誘つたのね」

「九月、九月」

「はいはい、もう二度と立てねえわよ。」

「ほんとうだよ、望の方が言い出したんだから」

母さんに浴衣の着付けを教わる代わりに、夕食の後片付けを手伝わされた。

部活や勉強にかこつけて、今まで母さんの手伝いをしたことがなかった。

食器を洗っている俺の隣で鼻歌なじりに片付けをしてくる母さんの顔が、うれしそうに見えた。

母さん、毎日こんなこと一人でしてたんだ。

「ありがとう

不意に言葉がついて出た。

「えつ？」

「こつもありがとう、って言つたの」

照れくわせの為に洗物から口をはなさなかつた。

「どういたしまして」

自然に聞こえる母さんの言葉。

皿が母さんの手の中で、かすかな音をたてた。

食事の上づけが終わり、母さんから着付けを教わる番になつた。

「ござ浴衣を着る段になつて、やつぱつ氣恥ずかしさでこしり込みした。

えい！ 武士で元は無い、俺は男だ！

しつかりと折り田の付いた浴衣に袖を通す。

難しそうに思えた帯も結んでみると、意外に簡単だ。

「昔の人は着物の下に下着を付けなかつたのよ」

「パンツはかねえの？ ありえねえ！」

「だから着物の裾がはだけないよつて内股でおしごとやかに歩くんですつて。 悠希もやつてみたら、少しほ女らしくなるかもよ」

「ぐえ、遠慮」

「悠希に女らしさなんて求めないから女心して。 悠希は悠希でいいの」

「父さんが女らしくしようと怒る時、『悠希は悠希』母さんはこつもんつをつてくれる。」

望が悠希として生まれていたなら、きっと、父さんの望むような可愛い女の子になっていたのだろう。

望と会わなくなつてから、俺は制服以外女の子らしきものを身につけなくなつた。

望を

この身体が女である事を忘れる為に……

だから浴衣なんて、小学校一年の時、望と初めて二人きりで行ったお祭り以来だ。

「似合う・か・なあ？」

「いいじゃない」

黒地に花柄の昔からありそうな浴衣だった。

可愛い系のこの顔には、奇抜な柄や粹な柄は似合ひそうもない。

「本当は、ピンクの可愛いのがあったのよ。わたしはそっちの方がよかつたけれど、それだと悠希が絶対着てくれないとと思って」

確かに母さんの選択は、間違つていない。

ピンクも似合うとは思うが、俺には着られない。

自分が男だという自覚がある俺には、この無難な浴衣が精一杯だ。

浴衣姿の俺は、洗面台の鏡の前に立った。

眼を閉じたまま。

瞼を開けるのが怖い。

普段、俺はあまり鏡を見ない。

鏡の前で髪をとかしても、それは、髪型を整えるためだけであって顔までは見ていない。

無意識のうちに鏡を避けていたのは、望を忘れようとしていたのかもしれない。

どんどん美しくなつていいく姿に、虚しくなつてくるからだ。

鏡の前で眼を開けた俺は、一瞬で鏡に映った姿に心を奪われた。

可愛い。

身体を反転させると、いままで止まっていた息を思い出したように吸い込んだ。

鏡に映った自分の姿に見とれていよいよじや、まるで鏡に求愛する小鳥のようだ。

鏡の前の自分にどんなに恋焦がれてもどうしようもない。

これは俺、望だけど俺だ。

生まれてくる前、俺はなぜすぐに本来入るべき自分の身体の中に入らなかつたのかと無性に腹が立つ。

そうしていれば、こんなややこじこにはならなかつた。

だけど、この身体もこれからどうなるのか知らない。

もし、死ぬよつたことがあつたとしても、俺は望の代わりに死ねて本望だ。

そうだ、その為に入れ換わつたのかもしれない。

えつ？

「悠希ちゃんが、浴衣を着てくれるなんて……」

いつの間にか母さんがドアの影から覗きながら、涙を拭うのが目に見つた。

なんか、俺もジーンときた。

病名が告げられた後、俺の前では病気の事を口にまじないけど、心配なのだ。

これから検査のための手術も控えている。

「やつぱつ、悠希には望ちゃんが、一番のかしこねー」

「なんだよ、それ」

「弓越すまでこつも言つてこだでしょ、望ちゃんをお嫁さんにするつて。いくらみんなが、悠希ちゃんがお嫁さんになるんだじゅつて言つても頑として聞かなくつて」

「それは……」

「私もその方があつてこると想つわ。悠希が良いお嫁さんになれるとも思わないし」

「なんだよそれ」

「それにしても、望ちゃんの威力は凄いわね。悠希に、あれほど嫌がつていた浴衣を着せてしまつのだから。そういうえば、前にもそんなことがあつたわね」

幼い頃、母さんが買つてくれたピンクの浴衣を着るのがいやで、黙々とこじねた。

『悠希ちゃんには合ひつけない』

やつぱつと望られ、俺はピンクの浴衣に袖を通したのだった。

それが、初めて一人きつでお祭りに行つた日。

そして、分かれの日になつた。

祭りの日、神社近くの道は、車両通行止めになる。

四時ともなると左右に立ち並ぶ屋台担当の人たちで賑わい始める。これから人出はどんどん増えてくるはずだ。

すれ違う人の中には、知った顔もちらほら混ざっている。彼女を連れた中学時代の同級生は、目をあわせた途端照れくさそうに会釈をしながら去つていった。

なぜお祭りに彼女を誘つてしまつたのか、今更ながら後悔した。

境内入り口には、人待ち顔の人々があたりを気にしている。彼女は既に来ていた。

マイペースな彼女は、子供の頃時間にルーズだつた。

「今日は早いんだ」

「デートに遅れちゃまずいつしょ……なに笑つてんだよ！」

浴衣姿の悠希ちゃんは、男の子と間違えたときは別人のようだつた。

「なんでも、クッククッ……」

「俺だつて、こんな格好恥ずかしいんだから」「に、似合つているよ、プツ」

「笑いながら言われたつて説得力ゼロだ！」

色白の頬をほんのりピンクに染めて睨みつける。

「悠希ちゃんが、昔、浴衣で木登りをして袖を破いたらことが

あつたでしょ。

それを思い出したら、「の鳥居も登つたじゃないかと思つて」「10歳で、そんなことをするわけないだろ……えつー?」

彼女は驚きの表情でぼくを見る。

「悠希ちゃんでしょ。 小学校2年のときこ転校していった」

「うと」

彼女は「べつとうなづいた。

ぼくは子供の頃、日頃気の強い悠希ちゃんが、うそとこつこつなづく姿が可愛いく思つていた。

照れくさくなつて、ぼくは一人で鳥居をぐぐり抜けようとした。

彼女がぼくのシャツの裾をつかんだ、それは子供の頃、ぼくが悠希ちゃんにしていたことだった。

ぼくはそつと彼女の前に手を差し出す、それはいつも、彼女がぼくにしてくれたこと。

彼女はぼくの手に触れかけて、すぐに下ろした。

一瞬触れた彼女の手はとても冷たかった。

夏祭りといつてもまだ五月、日が照つていない今日は寒い。約束の時間よりかなり早くから来ていたのかもしれない。

本殿の前には数名の人があ賽銭を上げ、鈴を鳴らしていた。一度お参りを済ませたあと再び悠希ちゃんはあ賽銭をあげた。「一回はお礼さ」

「お礼?」

「お願いするまえに願い以上のことが叶つちやつたから

そう言つた彼女がやけに女の子っぽくて、なぜだか人「みの中を歩くぼくの速度が少し速まつた。

「ひとつちょうどいい」

綿菓子屋のおじさんに彼女が声をかける。

「自分で作つてもいい？」

「それは……」

「いいじやん、お兄さん、お願ひ！」

手を合わせて拝んだ。

彼女はどんなに年上の人であろうとお兄さん、お姉さんと呼ぶ。

子供の頃、それが大人には受けていた。

「しようがない、可愛いお姉さんの頼みだ」

「やつた！」

子供の頃、綿菓子機のおもちゃを取り合つて作つたことがある。真中にある金属で出来た円盤状のものの中にザラメを入れる。熱くしすぎると糸にならずに回りの枠に溶けた砂糖がこびりつく。失敗しながらもつまくいつたときには、一人で棒までしゃぶつた。昔取つた杵柄か、悠希ちゃんは器用に砂糖の糸を棒に絡め取つていく。

「上手だな、姉ちゃん」

「えへへへ」

「少し手伝つていかないか？」

「兄さん、野暮はいいつこなしよ。」いつかとら逢引の途中よ

「そりや失礼したね、姉さん。 楽しんじくれよ」

「あいよ」

綿菓子を頬張りながら歩き出した彼女の後ろを追つた。

「あいかわらずだね」

「うん？」

「なんでもない」

「望も食べる？」

「ありがとう」

差し出された綿菓子を少しつまんで口に入れた。

今まで膨らんでいた砂糖はほくほくの口の中であつとこう間に溶けた。

消えていく綿菓子のように悠希ちゃんの関心は次々と移っていく。

「わー！ みどりがめだ！」

男子が亀をすくつているところを何人が眺めていた。

「あれって、でかくなると凶暴になるんだよな」

「えつ、そなんですか？ 今取つていいの？ ちの子なんですか？」

「す、すみません！」

ぼくは前から声をかけてきた女性に謝ると悠希ちゃんを引っ張つてその場を離れた。

「俺、営業妨害しちゃったかな？」

「そうみたい」

悠希ちゃんは、戦利品の黒出田金と赤い三つ尾の金魚が入った袋を持ちながら、綿菓子を満足げに頬張ると帰り道をたどり始めた。

子供の頃、ぼくはなにをやつても悠希ちゃんにはかなわなかつた。

唯一勝てるのが、金魚すべじだつた。

金魚を飼つてもられないぼくに代わつて、悠希ちゃんはぼくの捕つた金魚を持って帰る。

しかも、ぼくが沢山すくつたながら必ず黒いのと赤いのを選ぶ。もひつのはその一匹だけ。

自分の分の一匹も捕まえられない時にもらえる一匹は、絶対受け取らないのだ。

あの頃と変わらない。

しづらへ歩くと人の数もまばらになつてへる。

駅までは、まだかなりある。

「雨のサインだ」

悠希ちゃんが空を見上げる。

「えつ？」

「雨の匂いがある。 もつじき雨が降る」

そう言えれば、子供の頃悠希ちゃんは、雨の前によく言っていた。

雨が降り出すときは、スッとする水の香りに混じって埃っぽい匂いがする、悠希ちゃんはその匂いに敏感だった。

「まるでアマガエルだね」

ぼくは、あの頃の言葉を思い出した。

「ゲロゲーロ」

昔のようにに彼女はカエルの鳴き声をまねた。

辺り一画、黄色いフィルターをかけたよつになる。

二人で空を見上げる。

『一番最初に落ちてきた雨粒にあたると妖精に会えるんだって、だからぼくが悠希ちゃんに妖精を捕まえてあげるよ』

子供の頃、ぼくはそんな御伽噺を真剣に信じていた。

結局、一度も妖精に出会ひことなどなかつたけれど。

空が白く輝くと、ドラムを叩き壊したような大きな音がする。

「へー、望、怖がらなくなつたんだ」

「こつまでも子供じやないよ」

「頼もしいね」

その言葉が、くすぐつたかつた。

「あたつた！」

同時に声を上げた。

ポツ

ポツ

ポツ、ポツ

## バラバラバラ

一人の声が合図だつたかのように、雨粒が天からじつぱい落ちてきて次から次へと音をたてる。

彼女はぼくの手を握ると走り出した。

雨音と彼女の下駄の規則正しい音に對して、ぼくの心臓は不規則なリズムを打つていて。

神社から駅へ行く途中にあるぼくのマンションへ飛び込んだ。

だれもいない家の鍵を開けてぼくたちは中へ入った。

小学校以来、友達を家に上げたことはない。

ぼくはぬれた彼女の浴衣にアイロンをかけていた。

「へー、そんなこともできるんだ

「アイロンべらー誰だつてやるでしょ」

「悪いけど、俺やんない

「そんなんじゃ、いいお嫁さんになれないよ」

「いいよ、結婚しないから」

顔を上げたぼくの目に、シャワーを浴びバスタオルを身にまとった彼女の姿が飛び込んだ。

「えつ……着替えあつたでしょ」

「だつて、下着も濡れちゃつたんだもん」

眼のやり場に困つたぼくは、浴衣に眼を戻そととしたその時、彼女の行動に言葉を失つた。

なんど、ドライヤーでショーツをヒラヒラさせながら乾かしている。

「あ、あの、そんな格好でリビングにこないでよ。ぼくも一応男なんだし」

「あつ、欲情した?」

「そんなわけないでしょー。どこに下着をドライヤーで乾かしてると女に興奮する男がいる? 普通ひくでしょ」

「ならアイロンかけてよ」

浴衣の上にレースのついたピンクのショーツが置かれた。

「ルーツの問題じゃないでしょー。」

「なに怒ってるの壁。子供の頃はなんでも言ひと聞こてくれた  
じゃん」

「どうでもここから、早く」おどけ

「はーー」

アイロンをかけ終わる頃には、しづらへしていたドライヤーの音も  
やんでいた。

ぼくが、顔を上げるとこまではバスタオルをまとうまま彼女が、  
床の上に女の子ずわりをしている。

正座から左右に足を開きお尻を床につける男にはきつい体勢だ。

「へー、ルーツの」

「なにが」

「恋人同士、みたいな感じでさ」

「普通はアイロンかけるのって逆じゃなーの」

「そんなことないさ、それに……」

「「」んなところ、悠希ちゃんの大切な人に見られたら大変だね」

彼女には自分を犠牲にしてまで助けたい人がいるって、ひざびたに会つたとき言つていた。

「それより、おばさんたちが帰つてきた方がまずいんじゃないの？」

「今日は一人とも帰らない。結婚記念日だからね」

「へー、一人でお祝い。今でも仲いいんだ」

「まあね。悠希ちゃんのところは？」

「悠希でいいよ、ちやんは子供みたいだ」

「悠希……のうちは」

なんだか、“ちゃん”を取り除いただけで、ぼくたちの関係が変わつてしまつたようで変な気分だった。

「俺んとこは、普通かな。仲がよくもなれば悪くもない」

なぜか意外な気がした、悠希の口から普通といつ葉が飛び出していくことが。

今まで会つた人の中で、彼女ほど普通の似合わない人間はない。

「はい、これできたから

浴衣を彼女に渡した。

「あつたかい、望のぬくもりだ」

「アイロノ。ね。ビビドモニコナビ、早く着替えてくれない」

「あいよ

「なつ、なんで、」「」で脱いだするのー。」

「べつにいじやん、じつせおまえの身体なんだし

「なに言つてんの

その場で着替え始めそうな彼女に、ぼくは背を向けて、眼を開じた。

「なあ、覚えてないの、望。 小わざ頃に俺が言つたこと

ぼくは黙つていた。

彼女との想い出はあまりにこみこみつきて、どれのひとを語っているのか分からなかつた。

だが、ふとある言葉がぼくの口をついた。

「俺が望で、望が俺」

悠希が時々呪文のよじて言つてこた。

「お、それそれ」

白い光の玉の夢。

彼女に再会してから見るよじになつた。

そういえば、小さい頃もよく見ていた。でもそれは、悠希に洗脳されていたからだと思つ。

子供の頃、彼女によく“望が間違えて俺の身体に入つかけたから、仕方なく俺は望の身体に入つたんだ”と言われた。だから、本当は、自分が男でぼくが女に生まれるはずだった、そつ悠希は不満を漏らしていた。

幼い頃のぼくはその話を鵜呑みにしていた。

悠希ちゃんが言つ事なのだからきっとちがうに違いないと疑わなかつた。

それに、大人们もよく言つていた、悠希ちゃんが男の子で望ちゃん

んが女の子だつたら良かつたのにね、と。

「俺……約束守れないかもしねない」

「……約束つて？」

「お嫁さんにしてやるつて」

「そんな事？ そんな小さな頃の話しあえてないよ」

「だよな」

「第一、男のぼくが、お嫁さんになれるわけないし。 それによ」

一瞬、ぼくは、言ひよどんだ。

「きみには大切な人がいるんですよ。 だからわ、そんなこと気にしなくつたつていいよ。 きみがわ、現れなかつたらきみの事なんてすっかり忘れていたわけだし」

そうだ、実際、彼女に再び会つまで彼女の事はすっかり忘れていて、思い出しあしなかつた。

でも、他に言い方があつたはずだ。

「子供の頃の約束なんて、覚えてるわけないよな。 覚えてたとしあつて、本氣にするわけないし。 それが大人になるつて事だよな」

「きみじゃ、好きな人ができるんでしょう」

「焼きもち焼いてくれてるの？ 脤あり？」

「そんなわけないでしょ、きみなんてほくのタイプじゃない」

「じゃ、どういう人が好み？」

「それは……優しくて、控えめで、女らしくっても、もみとは正反対の人」

「」の間のラブレターの彼女とか

「彼女は……」

彼女に言われるまで、すっかり桜木さんのことを見失っていた。桜木さんの手紙には今日の6時に神社でと書かれていた。

手紙を読んだ後に、断ち切ったが彼女とは連絡をとる」とができなかつた。

時計は、もう6時45分ををしていた。

桜木さんは、まだまつているのだろうか？

「お似合いじゃん、付き合えば

「さうだね、さみよつよつめめの女うらじへといいかもね

五月に行われる日枝神社のお祭りは、よく雨が降る。

雨このお祭りだからだと、母さんから聞いたことがある。

子供の頃は、お祭りに降る雨は嫌いだった。

せっかくの屋台見物も雨が降つたから無

ナビ、今日の雨は恵みの雨。

望の家で一人の時間もてたから。

逢つ前は少しでも一緒に過ごせれば、それだけでいいと思っていた。

ので、会えば会つばかりといたくな  
離れられない。

こんな気持ちになら逢わなければよかった。

逢わなかつたら

来週は検査入院がまつている。

簡単な手術で組織を調べるひじご。

その結果が最悪の場合、死を覚悟しなくてはいけないかもしれないつて。

そうなつたらもつ望に逢えない。

そんなの耐えられない。

だけど、それは望のためなのだからと、ジレンマに陥る。

病氣のことを望に話してしまえば楽になれるのだろうか。

そんなことをしたら、望を苦しめるだけ。

せめて、望との楽しい時を刻もうと思つていただけなご。

一緒にいれば心地好きになつてこくの上、心せ、じぶんすされ違つ。

絶対交わることはないの?..

「悠希の方こそ、自分の命より大切な人がいるんでしょ

それって望のことだよ。

どうしてひとこといえないんだろう。

子供の頃は、素直にすきつていえたのに。

「焼きもち焼いてくれてるの? 脈あり?」

なんだかひねてる、俺。

「そんなわけないでしょ、悠希なんてほくのタイプじゃない

「じゃ、どういう人が好み?」

「それは……優しくて、控えめで、女らしくって、悠希とは正反対な人」

「この間のラブレターの彼女とか

「彼女は……」

そのとおり、初めて、望が時計を見た。

なんかさ、取り残された気分だったよ。

「お似合いじゃん、付き合えば

幸せにね。

死ぬかもしない俺なんかよりも、彼女の方が望のため。

素直じゃない。

「せうだね、きみよりよつぽよじ女の子うしへいいかもね

否[ゼ]してよ。

「俺、帰る」

「まへもこれから出かけるから、駅まで送つてこくよ

引き止めてくれないんだ。

だよね。

俺がどんなに思つても、望の心が手に入らないのはわかつてゐる。

なんか、そんな気がしてた。

生まれた時から。

俺はずつと<sup>ヒ</sup>思ひ。

きっと、生まれる以前から。

外へ出たとき、もう雨はやんでいた。

心は天氣とは裏腹、雨が降り出した。

マンションの前で望に見送られると、駅の方へ歩き出した。

しばらくして振り向くと、駅とは反対方向に駆け出す望の姿が見え  
た。

望の後を追つて駆け出していた。

慣れない下駄の上に浴衣の裾が絡んで走りにへい。

なぜ、俺、追いかけているんだろう？

どうしたいんだろう？

神社周辺は、望と歩いた時よりもっと人が増えていた。  
歩くがやっと。

望を捜して鳥居まで来ると、望と浴衣姿の少女が境内の人ごみへと  
飲み込まれていくところだった。

ラブレターの彼女と？

どうして？

俺と約束の日に彼女とも？

今までの楽しかった時間が核爆弾で一気にぶつ飛んだ。

望  
変わってしまったの？

お参りをした後、二人は楽しそうに屋台を見て回る。

金魚すくいのところで彼女が立ち止った。彼女は金魚すくいをするつもりらしい。

望にもいつしょにやるよつに勧めている。

二人だけの大切な思い出が消えていく。

俺のつかんでいる袋の中に、さつき望の捕つてくれた金魚が泳いでいる。

子供の頃、スポーツでは俺に何一つ敵わなかつた望。

唯一俺に勝てるのは、金魚すくい。

いつも一匹もすぐえない俺に代わつて、望がたくさんすぐつてくれる。

なのに、何匹捕つても屋台のおじさんは、一匹しかくれないのが悔しかつた。

かといつて自分が一匹も取れなかつたのを思い知らされるように泳ぐ自分の分の一匹をもらつのも嫌だつた。

それに仲間はずれを出すのも気が引けて、望の一匹だけをいつももらつて帰つた。

彼女は結局一匹もすくえなかつたらしく、おまけでもらえる一匹をもらっていた。

望のすくつた金魚はいない。

思い出は、わずかのところで消えなかつた。

俺が連れている一匹の金魚が、なんだか誇らしげに泳いでいるように思える。

俺、何してるんだ?  
望の後をつけるなんて。  
こんなのはよくない。  
だけど

二人は川沿いを歩いて行く。

神社から離れてくると、徐々に人通りも減ってきた。

しまいには、前を行く望たち一人と放れて歩く俺だけになつていた。

彼女が望の腕に手をまわした。

望はあわてた様子で腕を引き抜こうとした。

彼女に何か言われてやめた。

しばらく腕組みをしたまま歩いていた二人は、立ち止ると見詰め合つた。

あまり背の高くない望だが、彼女はさうに背が高い。

彼女が背伸びをした。

やつぱりだめだ、そんなの……

金魚の入った袋の紐が俺の手をすり抜けて落ちた。

かすかな音に気付き横を向いた望の頬に彼女の唇が触れた。

大変ご無沙汰してました。  
春に書いていた話が、載せるところには秋もめちゃくちゃ深まっています。

これからもよろしくお願いします。

よろしかつたらブログにも遊びに来てください。  
更新はのろいですが……

<http://ihori.seesaanet/>

## 20・悠希 3～俺も男？（前書き）

「いや、『めんなさい』。11話との設定にずれが生じていたことに気がつきました。（＾＾；）

そこで、11話との20話、若干変更させていただきました。

ただ歩いていた。

その場から立ち去りたくつて

どのくらい歩いただろう。

突然の激痛と足のもつれでその場に倒れた。

「大丈夫？」

痛みのためにしばらくは、声をかけられたのもわからなかつた。

「痛む？」

肩に触れられた手で、人がいることに始めて気がついた。

少し遠のいた痛みをこらえながら顔を上げた。

「朝霧先輩、な、なんで？」

「私の家、ここ」

ありえねえつていうほど立派な門構えの家だった。

「先輩つてやつぱ、お嬢様だつたんだ」

「そんなバカ言えるなら大丈夫ね。怪我の手当をしてあげるから上がつて」

先輩の部屋はシンプルだった。

本棚に机、窓際のベッド。

部屋の中央に敷かれた白いふかふかのラグの上には、丸いガラステーブル。

どれもこれもかなり大きくて立派なものだ。

俺の部屋には、入りきりそうもないほどだ。

これだけの家具が揃つていながら、閑散として見える。

本棚には、医学書が沢山並んでいる。

そういうえば、医者を目指してゐるって聞いたことがある。

「両親も医者だとか。

「女らしくない殺風景な部屋でしょ」

「いえ、そんな、女の子らしい…です」

語尾があいまいになつていた。

「おやじくせにいつて思つたでしょ」

「うん」

頷いてしまつてから、急いで付け足した。

「あつ、でも、俺の部屋に比べたら、ずっと女らしくです」

「無理しなくつてもいいわよ」

「俺の部屋、散らかつてゐるから、みんなに男みたいだつて」

「悠希の部屋、入つてみたま」

「じゃあ、片付けときます」

「それじゃ意味ないでしょ」

「ん？」

「散らかり具合を見てみたいんだから」

「先輩つて悪趣味」

あまりに整ったハーフっぽい顔の朝霧先輩は、大人っぽくて近寄りがたく見える。

けど、今みたいに笑っている時は、ちょっと幼く見えて、かわいくって、親しみやすい。

男つていういのギャップにほろりといつちやうんだらうな、シンデレとか。

案外と、先輩つてそれかもね。

普段はきりつとしていて、しっかり者でかっこいいけど、恋人と一人つきりになつたら、ゴロニヤーンて擦り寄つちゃつたりして。

うつ、変な想像しちまつた。

「もう痛くない？」

「わあ！」

「なに驚いてるの？」

落ち着け、落ち着け。

「先輩に傷の手当してもらつたから、平氣です

「そうじゃなくつて」

先輩は口ごもる。

「ありがとうございました。もう帰ります」  
急いで立ち上がるうとしたところ、手をつかまれた。  
かなり強い力で。

「病気のこと、顧問から聞いたわ」

「えつ、あつ、そのこと。大した事ないです。

検査してみなければわからないし、なんでもないってことになりますよ、きっと」

「わづね

「そんなに心配げな顔をされたらなんて言つたらいいのかわかんないよ。」

「こんなとこり他の人に見られたら殺されそうですね」  
話題を変えようと口をついて出た言葉がこれかよ。

「先輩、人気あるから」

「悠希だつて」

「桁が違います」

「そんなことないわよ」

「先輩の親衛隊、迫力あるし」

「ごめんなさい」

「いえ、先輩責めてるわけじゃ」

「私のせいでの、いじめられてるんでしょ。退部のことだつて」

「先輩のせいじゃないですよ。俺、生意気だから」

「そんなことないよ、可愛いもの」

「照れちやうな」

声を立てて笑つてみたけど、先輩のマジな顔見たらひきつてしまつた。

なにドキドキしてんだ  
俺には望がいるんだぞ。

なんか望と一人っきりのときよつもやばいかも。  
どうこいつことだよこれ。

「彼氏と何かあったの？」  
「彼氏つて？ いないし」  
「彼氏じゃないんだ」  
「？」

「今日、見ちゃった、一人仲良く歩いているの  
見られてたんだ。

「あんなに楽しそうだったのに、わたくしの悠希は辛そうだった  
「望とは幼なじみで。俺の片思いなんです」

望のことは親友のナオにも話したことがなかった。

今まで、完全に心のずっと奥に閉じ込めておいたから。  
でも、今はだれかに話したい気分。

今までのいきさつをかいつまんでも話した。

ただ、入れ代わって生まれたとかそういう部分は省略した。

話をややこしくするだけだし、先輩に変なやつと思われるのも嫌だつたから。

「どうして、今まで会いに行かなかつたの？」

「引っ越ししてすぐ、望の家に行つたんです。最初は望も彼の家族も大歓迎してくれて。俺も望の家は居心地がよかつたからうれしかつたんだけど」

もつずいぶん前の話だけど、思い出すと胸が痛む。

本当の両親となるべきだつた人達と望に逢えて俺は舞い上がつていた。

望の両親もすごく嬉しそうで。  
俺、調子にのつていた。

その時、望がどんなに淋しい思いをしていたかなんて考えなかつた。

『『まくのおかあさんとお父さんを取らないで』』

望はあの日俺にこう言つた。

望と俺が入れ代わったことによる両親との差を感じたのか。

それともただ単に、望の両親に大歓迎された俺に焼きもちを焼いただけかもしれない。

どちらにしろ俺は、ただ、望に嫌われたくなかった。  
愛されたいと思う以上に嫌われたくなかった。

嫌われてしまつたら、俺の存在理由が無くなつてしまつような気がして。

逢いに行くのをやめた。

逢いたかつたけれど、その気持ちに封印して。

「好きになつてもう以上に、嫌われるのが怖くなつて。  
だから、逢いにいけなかつた」

自分でも声が少し震えているのがわかる。

「死ぬかもしれないって思つたら、望のことしか浮かばなくなつて

背中に先輩のぬくもりを感じた。

優しく先輩の腕に包み込まれた。

「忘れればいい

耳元でかすかに空気が震えた。

「なにもかも」

この状況に戸惑いを覚え、ますます俺の脈は早まった。

先輩の手を無理やりほどくわけにもいかないし。  
いやじやないし……

なんだ、このもやもやするのは  
これって、男の本能?  
なんてやつだ俺つて  
望をこんなに想つてているのに

心と生理現象は別つて

いやつてまだ

俺も男？

皿口嫌悪

しづめいへすゐと、じめぞ感から安らかな気持ちになつてゆく。

いつしてみると、何もかもなかつたような気がする。

赤ちゃんに戻つたようだ。

赤ん坊に戻れたら。

だけど、望を想ひ気持ちは消えない。

だつて、生まれる前から望が好きだから。

このままずっといりつしていしたい。

やひぢやない

本当に望を抱きしめたい

望を感じていみたい

やつぱ、望が一番で

「あー！ 帰んなきやー！」

「具合がよくなつたら部に戻つていいしゃー」

すぐに返事を返すことが出来なかつた。

「退部届け私が預かっているから。私が卒業するまでこね

笑つて」まかした。

なんて、答えていいのかわからなかつたから。

玄関で別れを告げる頃になつて、現実に引き戻された。

「あのー、駅までの道、教えてもらえますか？  
イケてねえー！」

21・望 4 ～金魚

黒と赤

金魚

バケツの中

泳いでる

ぼくの

落とした

パンくず

丸い口に

吸い込まれた

「金魚なんてどうしたの？」

父と一緒に帰ってきた母が尋ねた。

「金魚すくい」

「めずらしいわね。何年ぶり？」

「8年、かな？」

「ああ、お隣の悠希ちゃんが引っ越してからね、ふふ～ん

母の口をついてでた悠希の名前にドキッとした。

「意味深な笑い、気持ち悪いな」

「だと金魚すくいしたのかな？」

「いいでしょ、だれだつて。それより、飼つてもいい

「いいわよ」

「ほんとこ?」

「ええ

「金魚だよ」

「いまさら何念押しているの?

いままでもいろんな飼つてたじやない。

まあ、金魚だけは、いつも悠希ちゃんにあげてたみたいだけど

そういえばそうだ。

なんで金魚だけ悠希にあげていたんだ?

金魚すくい

それは唯一悠希に勝てる、ぼくの男である証だった。

金魚すくいが男の証なんて大げさだけど、

当時のぼくにとつてそれはすごく重要なことだった。

男としてのプライドが保たれたのだ。

あやふやな記憶の中で

悠希は勝手にぼくのすくつた金魚のながら黒と赤を選んでいた。  
かたえくぼを作つて笑う悠希の顔を見ると、幸せだった。

悠希が引っ越していった時

金魚すくいは、ぼくにとつて意味をなさなくなつた。

男の証もプライドもかたえくぼも  
みんな消えてしまつたから。

「悠希ちゃんどうしてるのかしらね」

「悠希ちゃんか……」

今までそばで新聞を読んでいた父が呟く。

「双子に間違われるぐらい、いつも一緒にいたのにね。  
実際、同じ日におなじ病院で生まれて、まるで他人とは思えなかつたわ」

母は、含み笑いをした。

「男と女の性格がまるつきり反対で、男女よく間違われていたわね。  
今でも望は女の子みたいな所があるけど」

「つるさいな！」

自分の一番気にしている所を指摘されて、ぼくはむつとした。

「一人で尋ねてきた時以来逢つてないけど  
きっと素敵なお嬢さんになつていいでしょうね」

父は新聞に眼をやつたまま頷いている。

悠希の話題になつてから父は、ぼくたちの話をずっと聞いていたの  
だ。

「少しも変わっていないよ、男みたいな性格」  
ジエラード「一スター娘を思い出して言つた。

「やっぱり逢つたんだ」

「いや、性格なんてそんなに変わるものじゃ ないと思つてや」  
隠すほどのことでもないのに、なぜか彼女に逢つたことを隠して出せ  
なかつた。

「望！ 悠希とトークしたんだってな！」  
もののすゞいに剣幕でまりちゃんがぼくの教室に怒鳴り込んできた。

「好きなのか！」

「ぼくの胸倉をつかむ。

「や、そんななんじやないよ」

「じゃあ、俺が悠希と付き合つてもいいんだな

「彼女がよければ、いいんじやな」

「ホントだな。 後から口出しそるんじやねえぞ」

「はい。 でも……」

「なんだ！」

もともとデリバマの刑事かヤクザと紙一重の怖い顔に凄まれて、  
次の言葉を口にしているのかますます迷つた。

「まりちゃん」

「その名で呼ぶな！ なんだ、新堂か」

「そんなおつかない顔で脅したら、いこたいこともこえなくなつち  
やうでしょ。ねえ、望くん」

ぼくは小さく、でも素早く頷いた。

胸倉をつかんでいるまりちゃんの手を見てから、おやがおやの視線  
を顔に移した。

「ぼーら、その顔」

まりちゃんは、副会長の緊張感のない声に手を下ろすとそっぽを向  
いた。

開放されたぼくは、少しずつ後ずさりをしながらまつりちゃんの手が届かない範囲まで離れた。

「何かいいたいことあるのでしょ？」

ぼくはうつむいた。

「うべきか、いわざるべきか？」

昔、まりちゃんが悠希を好きだっていうのは、小さかつたぼくにもばればれだった。

なんに対してもストレートな彼が、悠希にだけはコクらないのが當時不思議だった。

そんな彼にいつていいものか？

「いりのう男には、はつきり言つておいたほうがいいよ。 単純なわりに、恋愛に関するずるずる乞うするタイプなんだから」

「うるせえ！」

「あのー、彼女には好きな人がいるらしいです」

「おまえだろ」

「自分の命より大切な人がいるって」

「だからおまえ」

「違うと思つ」

「デートしたんだろ？」

「あれは、傷心デートで」

「なんだそれ」

「彼女の好きな人がはつきりしないから彼女の傷ついた心を癒すた

めにといふわけで

「どあほつ、傷つけた張本人が、傷心テートしてどいつすんだよ。  
ただでさえ悠希、傷ついてるのに」

押し殺した声が、胸に響く。

「病気なんだ、死ぬかもしない」

死?

「検査してみなければつきりしないけど、もしかしたら命にかかるかもしない」

悠希が…

「…だから?」

死ぬかもしない?

「ぼくはどいつもこいつも?..」

まつりちゃんは、眼を見開いてぼくを凝視する。

「ぼくは医者でもなんでもない」

言葉は淡々と口からこぼれ出た。

心は彼の言葉を理解しきれていなかつたから。

「わかった。

悠希は絶対におまえだけにはわたさない……」

ぼくの側にあつた机を蹴飛ばすと彼は教室を出て行った。

副会長は肩を落とすとゆっくりと左右に首を振ると彼の後を追つた。

ぼくらのやり取りに聞き耳を立てていたクラスメートたちも、先生が入ってくると急いで席にもどつていった。

## 23・悠希4 むくわれない想いに

「かあさんて、ふられたことあるの」

「まあね」

横で洗濯物をたたみながら母さんが、ちらりとかえす。

「いがい。ふつたことあつても、ふられたことなんてないのかと思つた」

「ありがとう」

「誰にふられたの？」

「ないしょ」

かあさんは微笑んだ。

俺は、洗濯物の山からトレーナーを取るとたたんでみた。びっくりした顔でかあさんは、俺を見た。

「な、なにも、そんな、おどろかなくつたつて」

急に母さんは含み笑いを始めた。

「気持ち悪いなあ」

「だつてねえ。なにがあつたのかなつて」

「なにもないよ」

「今度、望くんを連れていらつしゃい」

「いきなりなんだよ」

「最近、悠希が変わつたのつて、望くんのおかげでしょ」

「変わつてねえよ」

「望くんがお嬢さんに来てくれたひつれしいわね」

「ありえないって、だつて俺……もう、会わないから」

「なぜ?」

「望の迷惑だから」

「やつ」

「やつて、他に言つてないの?」

「迷惑なんでしょう?」

「べつに、望がいつたわけじゃないよ」

「でしょ、あのことは悠希を傷つけるような言い方しないでしょ、ほかのこにならわからぬにけれど」

「ほかのこって?」

「望くんて、誰にでも優しくして意外と冷たいところがあるのよ」

そうかもしれない。

小学校のときも、バレンタイン「ほかのこからもらったチョコ」を相手に返していた。

まわりに誰がこようがお構い無しにだ。

しかも“もらひ理由無いから”たつたこの一言を添えただけなのだ。

なかには泣き出しそうもこたけれど、この時ばかりはなんの慰めもなく立ち去つてこべ。

ほかの子には悪いけど

そんな望の態度、俺はうれしかった。

俺はバレンタインにチョコをもらひたことがあってもあげることなしになかつた。

俺は男だからとこきがついていたけど、本當せよわかったのかもしない。

望ことひで自分もほかのじたかと同じだつたら……

俺とかあさごのどかなひと時を過ぐしてくると、おりがやつてき  
た。

神妙な態度のまつを部屋に通した。

俺はベッドに腰を下ろした。

まつは俺の部屋に来たときの定位置、学習机のイスに腰掛けた。  
といつても、最近はせいぜいメールのやりとりぐらいで、部屋にく  
ることはなかつた。

「まつ、話つてなんだよ」

「まつて呼ぶな」

「そんなこと？ ただでさえ怖い顔なのに、真剣な顔してるからな  
にかと思つた」

「なあ」

真理は右手を軽く握つて人差し指を親指ではじいてい  
る。

何かいいにくいことがある時、決まってこのじぐわをする。  
单纯でわかりやすい。

ほついたら何時間でもやせやつていいかもしれない。  
身体はでかいくせに意外に気は小む。

「何がいいんだよ」

まつはたぶん望のことで来たのだ。

俺が望と逢つたのを知つてから、頻繁にメールをよこす。  
そんなにまめなやつじゃなかつたんだけど。

「悠希が望のことを好きなのはわかってる」

そんなことはみんなが知つていてる。

子供の頃、望が好きなことを公言してはばかりなかつたから。

「だけど、あいつはどうなんだ」

「関係ない」

「関係なくないだろ」

「俺が好きだから、それだけでいい」

「よくない！」

真理は立ち上がると俺を睨んだ。

「声でかすぎ」

「す、すまん」

俺の隣にゆづくつと腰を下ろし、真理はうつむいたまま再び指をはじき始めた。

「まりは相手が自分を好いてくれてるから好きになるの？」

「そ、それは」

「自分の気持ちは、相手の気持ちと関係ない

真理が一番わかつてゐるはず。

いきなり俺を真理は抱きしめた。

「なにすんだよ…」

あわてて真理の手を振り解こうとするが、真理の身体はびくともし

ない。

いつの間にこんなに逞しくなつたんだろう。

「俺はおまえが」

俺は動きを止めた。

「……すきだ」

大きな団体からは想像がつかないほどか細い声だった。

真理の気持ちには、子供の頃から気がついていた。

けど、いつも彼の言葉をさえぎつて、その言葉を聞くのを先送りにしてきた。

聞いてしまつたら今までの関係が壊れてしまつたので。

なのに、今、俺はさえぎらなかつた。

「あいつのことば、忘れる」

なんで、真理の言葉を止めなかつたんだろう。

「だめか？ 俺じゃ」

厚い真理の胸の中で、なぜだか涙が溢れてきた。

いきなり下がった俺の頭が真理の顔面を直撃した。

真理のTシャツを濡らしてしまつたのではないかとわずかに顔を離した。

真理の顔が迫つてくるのを感じる。

やばい。

「いてえ！」

真理が悲鳴をあげた。

「い」「ごめん」

「ゆるさねえ」

「だ、だつて、し、真理がわるい！」

真理は顔を赤くした。

色黒だから赤くなつたのかは定かではないが、やましいところがあるのか、一瞬たじろいだのだ。

しかも、俺が『まり』ではなく『しんり』となんだことにも気づかないほど動搖したのだから。

「あ、あのさあ、来週から検査入院だつて」

「まあね」

「話さなくつていいのか？」

「誰に？」

「いや、いいんだ」

「望には関係ないだろ」

「そのために、逢いにいったんじゃないのか」

「逢いたくなつたから逢いにいった、ただそれだけ」

真理は眉間に皺を寄せた。

「病気のこといってどうなるわけじゃないし  
真理に視線を向けると彼は顔を背けた。

「そ、そうだよな。い、いわないほうがいいかも。

無駄な心配かけるのもよくない。」

今回はただの検査入院だし、なんでもないってことになるわ、わ  
と「  
棒読みなセリフ。

俺は真理の頭に左腕を回し、思いつきり右手で最近伸ばし始めた髪の毛がくしゃくしゃになるほど頭をなでてやった。

「や、やめろよ」「  
「真理ってほんとこいやつだよな」「  
「今頃気がついたか、  
つて、今、なんていった」「  
「一度といわねえ」「  
「名前、よんだよな」「  
「さあね」「  
「なあ、なつ、もつ一回」「  
手を合わせて俺を揉む。

「そんなことよつ、絶対望にまつわるよな」「  
「そ、それは……」「  
「命令だ！」

「……いつた」「  
「なに?」「  
「病気のこと、あこつこ話した」「  
「なんで。望が傷つくなじやないか」「  
「あいつは悠希のことなんとも思つちやいないんだ。だから、忘  
れろ」「  
「わかつてゐる」

今にも泣き出しそうなぐらい顔をくしゃくしゃにして真理は俺を見つめる。

俺の心を鏡で映したらきっと今の真理の顔と同じかもしれない。

真理の今の気持ちを俺が一番わかつていて、

俺の気持ちを世界中で最も理解しているのが真理だ。

「俺たち、バカだな」

俺は苦笑した。

想つても想つても振り向いてもらえないのはわかっているのに。

真理を見ていたらなんだか自分がかわいそうになつて、自分をそんなふうに今まで思つたことなかつたのに。

真理のことが好きだつたら

どんなに楽だろうね。

俺は優しく真理の頬にキスをした。  
彼と俺の報われない想いに。

「ひどいよ！ 悠希！ なんていつてくれなかつたの、俺の唇が真理の頬にかすかに触れたとき、大きなドアの開く音と同時にナオの怒鳴り声がした。

真理はドアが開くと同時に立ち上がつた。

「あつ」

かすかな声とともに開かれたナオの口はしづらく閉まる「」とはなかつた。

「」につ、従兄のまり、いや、真理

「はじめまして、小向ナオです」

「あつ、どうも」

二人ともなんだかぎこちない。

真理はともかく、人見知りしないナオの様子までなんとなくおかしい。

ひょっとして、見られたのか？

「じゃ、俺、失礼します」

「もうお帰りになられるちゃうのですか？」

なんだ、「」の変な敬語は？

「はい」

「残念ですか、せっかくお会できましたの」「

失礼します」

まるでロボットのようなギクシャクした動きで真理は出て行つた。

「」きげんよ「」

満面の笑みをたたえてナオは見送った。

「さすが悠希、あんなかっこいい人が従兄にいるなんて。ああ、あたしも欲しいな」

しばらく呆けた顔をしていたナオが、早口でまくし立てた。

「かっこいいねえ……」

そういえばナオは「アリラタイプが好みだつたつけ。

「悠希！ ビうじて黙つてたのよ

今までハートだったナオの目が、いきなり細べつりあがつた。

「真理のこと？」

「それもあるけど、じゃなくって、勝手に部をやめちゃったこと、それに病気のこと隠してたなんて、あたしたち、親友じゃないのー。」「めん

「あんな嫌がらせぐらいで大好きなバスケやめちやうなんておかしいと思つてたんだ。

ねえ、検査でなんでもなかつたら、部に戻つてくるんでしょ。顧問もみんなも心配してるよ」

「うん」

「だつたら明日、退部届け撤退に行こうね

「それは

「まあ、大変な病気の可能性もあるから悩むのはわかるけど、ねつ、いいほうに考えよつよ。

そうだ、朝霧先輩に相談しようよ」

「ううへん

朝霧先輩と聞いてなんだかドキッとした。

あの時、先輩の自分に対する気持ちをなんとなく感じちゃったから、すこく意識しちゃう。

それに、先輩のフルモンにあてられたっていつか、次にあんなシチュエーションになつたら俺、我慢できる自信ないし。

「決まりね。明日、朝霧先輩に相談するってことで」

「また！」

立ちかけたナオの足にしがみついた。

うつ、なんてといつかんてるんだ。急いで手を離した。

「あ、あ、あの、検査結果がわかつてからつてことで……」「そうよね、悠希も結果が出ないことには心配でほかの事考えられないよね。

わかった、とりあえず保留にしてもらえたるよつに先生に頼んであげる

「あつ、そのことなら」

「まかせなさいって。それより、従兄のシンリちゃん、彼女いないの？」

「たぶん……」

俺を口説ひつかるぐらうだからな。

「じゃあ、今度セッティングしてよ」

「なにを？」

「合コンとか、そのへ、キャッ、テ・ー・トとか」

「はあ？」

「それで、今回のことをなにしてあげる。よひじくね

そういう残すとナオは帰つていった。  
そして俺は、すでに退部届けは保留状態になつてゐることをいいそ  
びれてしまつた。

## 25・望 5～葬儀（前書き）

ラブホの話が出てくるのですが、なんたって望と悠希ですかりひつ  
ともエッチじゃない。

それでも気になる方は避けてください。  
といって、期待されても困るのですが（f^ ^）

まつりやんから悠希が病気だと聞かされた次の日、彼からメモを渡された。

悠希の住所。

彼がどんな気持ちでまくへに渡したのか。  
それを思つとメモ帳送りにまできなかつた。

そつなの・か・な?

悠希の家へ近づいてまくへの喪服の人々を見かけた。ひなつた。  
ぼくはだんだん不安になつてきつた。

道の両側に並べられたまくへの花輪をまくへしたとき、胸を締め付ける  
れる想ひだつた。

まくへの喪服にまわされて悠希のお母さんがいた。

「ひょっとして、理りやん」

「ぼくと田が合つて寝かしこ声とともに泣きこむれた。  
「壁ひやんでしょ、弘前さんかの」

「お久しぶりです。この度は……」

おばさんの後ろから現れた人影に言葉をあわてて飲み込んだ。

「よつ！ なに望、泣きそうな顔しての？ 大石のおばさんと知り合い？」

場違いな明るい聲音にこぼくは細かく首を振った。

「もしかして、俺に逢いに来ててくれたの？」

「まりちゃんが変なこというから」

「なんて？」

「あつ、いや」

悠希が亡くなつたと勘違いした、なんて、本人前にしていいよ。

悠希は耳元で囁いた。

「俺が死んだとでも言つた」

心臓がバクバクした。

悠希の顔が近づいたからか、それとも、彼女の死といつものを身近に感じたせいか？

「俺、望と話しあるからちょっと遅くなる」

「話なら家ですれば。わたしだつて望ちゃんとお話したいもの」

「母さんは、まだ手伝い残つてるんだろ」

「ゆつくりしていつたつていいじゃない、ねえ、望ちゃん」

「俺たちこれから行くところのあるの」

「そうなの？」

おばさんは名残り惜しそうにこぼくたちを見送つた。

「どう行くの？」

黙つたまま歩く悠希の後には続いた。

「身体の方はいいの？」

「まあ

曖昧な返事をする。

彼女は後ろのまばくを気にする様子もなく、ただ歩いていく。  
ぼくがこのまま立ち止まつたとしてもそのまま気づかずに行つてしまつただろうか？

じてじてぐる涙を暗くなつた空を見上げることでからつじて止める  
られた。

なんだか、この気持ち？

いきなり立ち止まつた悠希の背中を田前ひまへも止まることができる  
た。

「なあ望、望が嫌だつて言つなら、俺、もう逢いに行かない。  
だから、最後にひとつだけ頼みきつてくれる？

おれを覚えておいて」

「なにつてるの

そのとあは、悠希の本当の言葉の意味を理解していなかつた。

悠希はまく手を強くつかまれ派手な建物の中に引きずつ込まれた。

「な、なにするんだよ。」

大声をあげたかったが、そんな雰囲気の場所でもなかつたのでなるべくこらえた。

「子供の頃、約束したじゃん」

「つむじで口をとがらせてほそほそとしゃべる。

「約束なんかするわけないでしょ。」「ううて、あの……いかがわしい場所でしょ」

「ぐ、くつ、くつ、くつ、いががわしい場所だつて」

悠希はつぼにはまつたらしく必死に笑いをこらえながら体中を震わせている。

「帰る」

「お・し・ひ」

「なに?」

ぼくの質問に対し一呼吸おいて、やつと笑いがおさまったのか悠希は話し始めた。

「望が子供のころ、『お城だ!』といつてよろこんだたら」

幼稚園の頃だろうが、ここができたのは。

両親に連れて行って欲しいといつて断られたことがあった。

今考えるとあたりまえなんだけど。

「俺にいつたじやん、連れてってくれつて」

そ、そういうえばそんなことがあつたかもしれない。

あの頃、親でだめなときは悠希に頼んでいたような気がする。

悠希はまるでぼくのスーパーマンだった。なんでもかなえてくれる。

だけどあの日は、あつという間に作戦は失敗した。

冒険だ！ といつて勢いよく飛び込んだぼくは、すぐ従業員見つかってに追い出された。

大人になつてからおいでつて。

うん？

「あ、あれは」

悠希は首を傾げて、じわじわしてくるぼくをみる。このじぐさにぼくは弱い。

「俺、望との約束は必ず守る。お嫁さんにするのは無理だけど嬢をんなりいこよ」

「あたりまえでしょ」

「結婚してくれるの？」

「やうじやなくつて」

「望、部屋に入つたことある？」

悠希の話は、昔から口口口口ネの田のよひに変る。

「決まつてゐでしょ！」

「入つたことあるつて」

「あるわけない！」

声を張り上げると同時に、中年の男女が入つてきた。

ぼくと悠希は、回れ右をするように後ろを向いた。

ぼくは学校帰り、悠希も葬儀ということで制服を着ていた。

ぼくたちのことを話してくるじこぼそとした女性の声が通り過ぎのを確認してから、ゆきへりとぼくは振り返った。

受付に立ち止まつている女性がちらりとこちらを見るのと視線が合つた。

彼女は急くよつて男性の腕を引き消えていった。

「なあ、部屋、気になんない」

興味がないといったら嘘になる。

外観がこんなに派手なのだから部屋はさぞかし立派なのだろう。

「やっぱ気になるだろ? なつ、社会見学と思えばいいじゃん。みるだけだから。なにもしないよ」

う~ん、男子が女子にいわれる言葉でなによつた。

まあ、ぼくと悠希の間はいつもそういうだつたのだけど。

「なつ、いいだろ」

甘えた声を出す。

悠希の言葉に押し切られる形で部屋を借つむことにした。

部屋に入った悠希は首を一巡させると丸い大きなベッドにダイブした。

「うへーー! なにこのボタン」

ベッドのリモコンをいじくり始める。

「わっ!」

ベッドが回り始めたり、カラフルなライトが点滅した。

悠希は、ぼくを巻き込んでひとしきり遊んでいた。

しばらくして、暗い天井に一面の星を映しゆつべッドが回る状態に落ち着いた。

彼女はベッドの真ん中で大の字になつて天井を見つめている。

「のぞむ。俺をみてくれる?」

ぼくはベッドの端に正座をして星を見上げていたが、彼女のほうに目線を落とした。

「俺を覚えていてくれる？」

悠希はジャケットのボタンを外しブラウスのリボンに手をかけた。

悠希から視線を外した

「望には覚えておいてほしいんだ」

精密検査これがなんでしょう

ぼくを恨んでるわけ、ぼくの代わりに死ぬかもしれないから。だか

ら今頃になつて現れたの！」

政治小説の歴史と現状

だけど、今頃現れて死ぬかもしれないなんて話を聞かされて、ぼくはどうすればいいの。

もし、悠希が昔いつていたようにぼくが間違えて本当の彼女の身体に入つてしまつたのだとしたら。  
本当はぼくが死ぬはずだった。

「きみが女子になつちゃつたのも病気になつたのもぼくのせい」

ぼくが困らせている。

沈黙が怖い。

せりひびことをぼくはこつこしまこそいつ。

「なんかさ、男だとか女だとかもつべりでもよくなつた。俺は俺だし」

「俺は俺だと言い切る悠希がついついまたしかつた。  
ぼくはなんなんだう。」

「それよつ、この身体守れなかつたことがくせじへつて……」「めん」  
両腕で悠希は顔を覆つた。

「だつたら守つてよ……」

悠希まで届くがどつかのボリュームの声にはかすかなビーフィートがかかつっていた。

「最後まで守つてよ。

もとに戻るまで。

いつだつてそなんだから悠希は！　勝手に引っ搔き回しながらも  
いわすにどにかへ消えちやう。

引っ越していくときも今度だつてきつ。

それに、

それに、

引っ越ししてすぐに遊びに来たときも黙つて帰つたりやつて

いつ起き上がつたのか悠希はぼくをみてくる。

「あれは」

「なに」

「望に嫌われたくなくなつて」

「どうして？」

「盗るな、つていつたる」

「なにを？」

「おばさんたちを」

「えつ？」

「俺がおばさんたちと話してたら、不愉快をつらじていて、それか

ら、盗らないでつて」

「うつこえばそんなことつたかも知れない。

「だから俺、望に嫌われると思つて」

「あ、あれは」

悠希とせつかり逢えたのにお母さんたりじょばかり話していくから。  
ぼくは悠希と話したかつただけなのに。

「なんだよ」

「あれは、その……」

「が裂けてもいえない。

「いつも、望を苦しめて、『めん』

「そんなことないよ」

「俺、望をすきなだけなのにな」

「ぼく……」

「なあ、後ろから抱きしめてくれる？ あつ、い、いやだつたらいいんだよ、べつに」

悠希は顔を桜色に染め目線を合わさないようした。  
いつでも悠希の提案は唐突でぼくを驚かせる。

そして、いつもぼくはそれに逆らえない。

ぼくはおれるおれる彼女の背中から両手を前に回した。  
悠希の身体は一瞬強張つたが、力が抜けると細いわりに柔らかかった。

本当は、ぼくが入るはずだった身体。

悠希は生まれる前の記憶があるといつ。  
ぼくが間違えて悠希の身体に入ってしまったと言っていたけれど、  
それが本当か嘘かぼくにはわからない。  
ただ、今、それは大したことはないよつた気がする。

「友だちがいってたんだ。」「うしてもうつと、女の子でよかつたなつて幸せ感じるつて」

「悠希は男の子なんでしょ」

なんだか照れくさくて、わざと意地悪を言つてしまつた。  
でも、ほのかに伝わつてくる暖かさは、ほのかたくなだつた心を少しだけ溶かしていくような、そんな気がする。

「い、いや、あの……だから、男だとか女だとかじやあなくつて」

「自分でいつたんだよ、女の子でよかつたつて」

「それは」

悠希の顔は見えないけれど、彼女の口をどがらせて丸く膨らんだピンクのほっぺたが目に浮かぶ。

ぼくはいつも、自分の居場所がここではないと感じていた。  
それは子供の頃悠希がいつも『ぼくが男で望が女の子だよ』そいついたせいだと思つていた。

それも、今は違つ氣がする。

自分の居場所は心の中にあるのかもしれない。

だれかの

そして

自分の

「すきだよ」

髪をかすかに揺らめくの囁き

ちこちい、だけどピコンと張つた弦の音色のよひに透き通つた響きが、ぼくの心もほんの少しふるわした。

今までのがむしゃらな悠希の思ひよつも

「ぼくは……悠希が想つてくれるやうに、想つひとでやるかわからぬ  
い」

「そんなのかまわない。望が望であれば  
ぼくはぼくと胸をはつて言へる口がぼくにもやつてへるのだから  
か。

25・望 5～葬儀（後書き）

残すところビローブのみになりました。  
あとしませんがお付き合いでお願いします。

あの日以来、悠希に逢うことはなかった。  
お見舞いは、彼女が拒んだからだ。

『映画のことなんだけどさ、好きな人がいたらやつぱり死にたくな  
いって思うよね。二人とも生きられる方法を考える。だから俺、絶  
対に病気に負けない。でも、望に逢ついたらそれだけでいいって  
思っちゃうから、治るまでお預け』

別れ際のふざけたような言い方とは裏腹に、それは悠希の本心だと  
わかったから。

彼女の意思に附おつと思つた。

そうじやない。

なにより、ぼくが彼女に逢いに行つたら、昔のように突然彼女が消  
えてしまうのではないかって、そんな不安を感じていたからだ。  
だから逢いにいけなかつた。

あの日以来の生活は、まるで悠希に再会する前に戻つたようだつた。

真理先輩もなにもいつてこないし、ぼくからも聞かない。  
それは悠希が生きている証拠だつて思うから。

高2になつた始業式の帰り道、いつもの公園を歩いていた。  
満開の桜の下を入学式に向かう新入生や母親たちとすれ違つ。

桜のトンネルの向こうは真っ白に輝いていた。  
まるで新入生達の希望が光つてゐるようだ。

希望か

『悠希の希は<sup>のぞむ</sup>望と出会つて希望になるんだ』  
そんなキザな台詞を小さじころから悠希は恥ずかしげもなくいつて  
た。

桜吹雪の向こうに、また人の形が現れた。  
光の中から生まれ出たようだ。  
目を細めてその姿を仰いだ。

同じ高校の制服を着た少女が駆け寄つて来る。  
肩より少し長めのストレートヘア。

「おひやしぶり」  
ぼくは平静をよおつた。  
「ちえつ、わかっちゃつた？」  
ちょっとと頬を膨らませている。  
どんな姿で彼女が現れようと、もう見間違えないと思つ。  
「元気になつたんだ」

「うん」

彼女は大きく頷く。

「でも、これカツラ。まだ短いから」

照れくさそうに前髪を引っ張る。

「望の趣味にあわせました」

「ぼくの趣味？」

「そう」

「どうして？ ショートもすきだよ」

「えー、そうなの。望は絶対ロング派だと思ってたのに」

ぼくはかすかに微笑んだ。

「それも似合つてるよ」

「だろう、絶対いけてると思つたんだ。奮発したんだぜ」

悠希は首を振つて髪を空中に泳がせた。

「その制服」

「一年の悠希です。先輩、よろしくね。うふつ

スカートの左右を軽くつまんで小首をかしげ、右足を後ろに引いて

軽くポーズを取る。

「俺にまかせとけ。悪い虫は追つ払つてやるぞ」

俺の後ろからうわずつた声がする。

「真理！」

悠希がうれしそうに声をあげる。

「さつそく、こいつを追つ払つてやるつか？」

「望はいいんだ、ぼくの大切な人だから」

？

「た、た、た、大切な人！ お、俺は認めねえからな」

「うるせえな、真理はあつちいってろよ。ぼくは望と話がしたいんだから」

？ ?

「毎日見舞いに行ってた俺よりも、一度も来なかつた薄情なこいつがいいのか？」

「あたりまえじゃん。好きな人には元気な姿しか見せたくないの、  
ぼくは」

？？？

「？ぼ、ぼく？？」

「わたし”だと、まだちょつと抵抗があつて。俺よりいいだろ、  
ちよつとは女の子らしくつてさ」

「まあ……」

五十歩百歩といつが、”ぼく”とか”俺”とかの問題よりも話し方  
の方が問題？

一年近く経つたぼくの身長は、彼女より少し高くなっていた。

そして、今彼女は自分のことをぼくといい、いつの日かわたしとい  
うようになるだろう。

たぶん…かな？

やがてぼくも俺に変わるときが来るかもしれない。

ぽたん雪のように降り注ぐ桜の花びらを身にまつた彼女を見つめ  
ていたぼくの心臓が、一瞬ドクンと大きく波打つた。

今まで読み続けていただきましてありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9519d/>

---

ぼくがぼくであるわけ

2010年10月10日12時36分発行